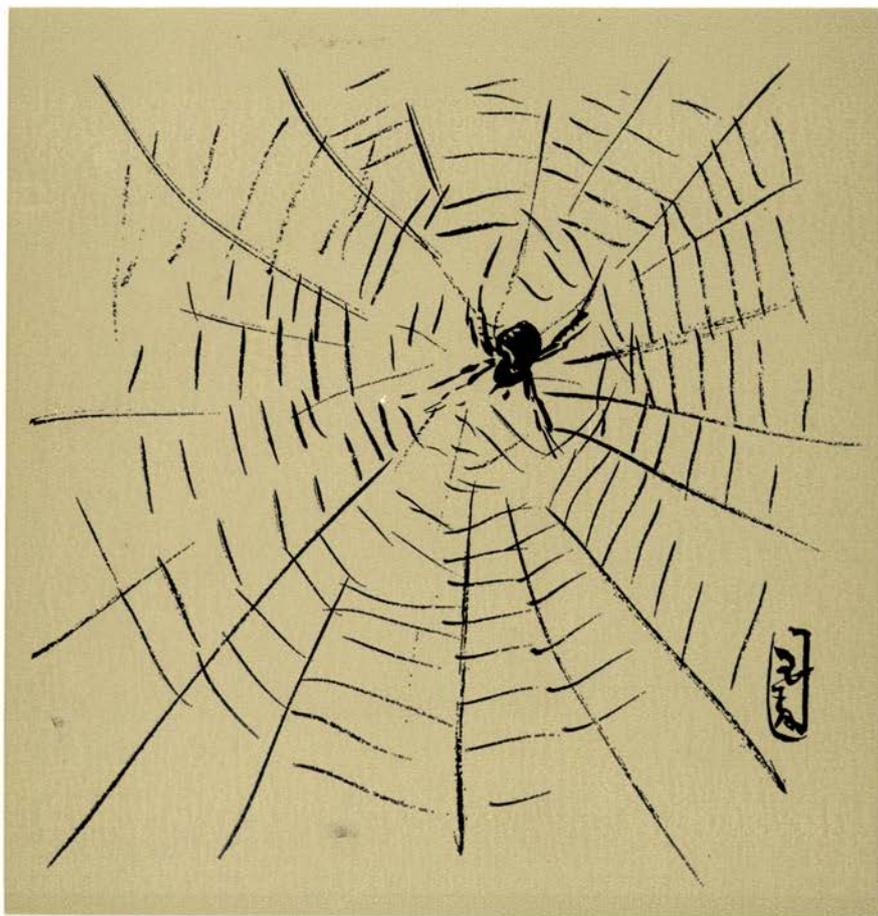


川柳塔

昭和四十九年六月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷五六五号



No. 565

六月号

姉妹品大和錦印



警察庁・警視庁
全国府県警察
大阪府警察本部
講道館・御指定

柔道衣 剣道具

早川繊維工業株式会社 大阪支店

大阪市天王寺区倭人町29番地の1
電話(779)1690~2番

川柳塔社同人256名参加、

同人句集『川柳塔』

昭和49年7月7日路郎忌当日発行



アベノ近鉄 ● TEL 621-1231



上本町近鉄 ● TEL 779-1231



奈良近鉄 ● TEL 33-1111

アベノ
上本町
奈良

 **近鉄**

夢が広がるシヨッピング
近鉄がお届けします

ヤングのための
カジユアルウエア

クラブウ *Kurabo* fabrics
カジユアルウエア

【倉敷紡績株式会社】

ものを見るめ

昨秋から今春までの経済界に起ったパニック問題は、今頃になって商人側が悪かったの、消費者側が悪かったのと反省やら批判が出て居るが、私はどちらもどちらという感じを持って居る一人である。根っからの悪徳商人でなくとも「早く買わぬと品切れになりませぬ」とか「他では絶対に真似の出来ないお値段が今日で終りますぞ」といった程度であれば、寧ろ商魂の常識ではあるまいか。「如何にして尤もらしいウソをつくべきかを研究するのが広告術である」と定義づけてる

人がある。そうしてみると、尤もらしいウソがどこに匿くされているかを発見する能力は消費者の方で用意せねばならぬ事になる。勿論川柳作句にはウソもなければ悪もない。ただ、個性を失った技巧だけの句に眩惑されなだけだけの用意は鑑賞する側に大切であり、而も経済界のパニックのようにスピードの急な変革が現われただけに、根強くしのびよる影響に対応する心構えが肝要ではないかと思う。

春の雨酒では消えぬひとりぼち
会者定離見栄はほどほどになされませ
倅せに溺れて眠る日向ぼこ
自縄自縛遠慮がすぎた檻となり
慌ててる指がダイヤル読み違え

庵 々 生 島 中

川柳塔6月号

川柳塔六月号目次

座右の句

俺に似よおれに似るなと子を思い

(路郎)

私の句

親よりも息は親の日々思て呉れ

葛城伊三郎

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

ものをみるめ

中島生々庵 (1)

持ち味

川村好郎 (2)

誹風柳多留廿五篇研究

(二)

(22)

清 博美・八木敬一・紀内恒久・青木迷朗・西原 亮
鈴木 黄・室山三柳・入江 勇・岡田 甫

鼻の珍太郎

東野大八 (24)

川柳塔(同人作品)

中島生々庵選 (4)

水煙抄

川村好郎選 (30)

吉川雉子郎(英治)先生とその川柳

若本多久志 (26)

一分間の柳論

小島蘭幸・竹中肖二 (43)
両川洋々・清水一保 (53)

秀句鑑賞

(同人吟)

正本水客 (37)

(水煙抄)

浜田久米雄 (46)

「旅人」以後の麻生路郎作品

(30)

富士野鞍馬 (29)

川柳中山道六十九次 (16)

富士野鞍馬 (38)

持ち味

川村好郎

そろそろ鮎の季節に入ります。私は余りさかなは食べませんが鮎は大好きで毎年鮎の出る時を待ちかねます。鮎を好きにさせたのは大分以前に或る人に教えられて愛宕の平野屋で食べた鮎であります。

鮎はやはり保津川のがよい。もみじのしたたる緑陰で、笥の引かれたいけす池からすくいあげられた鮎を備長の炭火で焼いた、解禁間もない若鮎の味は思い出しただけでもよだれが出そうです。鮎は塩焼きにまさる味はなく、酒の味も一入増すものです。

先年ある人に招かれて嵐山の某料亭に行きました。そこで鮎が出ましたが生臭くてとても二尾と食べられない。がっかりして後でその料亭の女中にそのことを話したら、忙しいのでいつもガスで焼いているのだと云うのです。平野屋と同じ川の流れの鮎でありながら、こんなにも違うものかと思った。平野屋

近作

句集「川柳塔」……………諸家
高鷲亜鈍 (28) (29)

鬼子の弁……………不二田一三夫 (40)

きのう・きょう……………大路美幸 (42)

湯郷吟行に浴けこんで……………本多柳志 (43)

バベルの塔……………野村太茂津 (44)

大阪訪問……………光武弦太郎 (36)

雅号ぶっちゃけばなし……………馬場魚山 (51)

初歩教室……………阿部柳太 (57)

大萬川柳「馬鹿」……………木村涼人 (63)

柳界展望……………和田維久子 (59)

本社五月句会……………本田恵二朗 (52)

各地柳壇(佳句地10選)……………川村好郎選 (54)

おもちゃ……………(庸佑) (56)

「父の日」……………野村太茂津 (58)

「買易」……………山本立児選 (62)

一路集……………島田雄峯選 (47)

編集後記……………大鶴喜由選 (48)

……………国弘半休門選 (49)

……………(一二三夫・葉子) (66)

……………(66)



座右の句

思い出の道は避けたし通りたし

私の句

幸福は親子に嘘のない暮し

(好郎)

江城修史

は鮎の本質の味を生かすよう、鮎と勝負して
いるのだと知ったのです。

鯛は鯛、鯛はいわし、鮎は鮎、同じ魚類で
あっても形が異なるようにそれぞれ特有の味が
あり、それを生かすようそれぞれの料理法食
べ方をせなければならぬ。そこに独自の味
が生れるのだと思う。

何の商売でも餅はもちやという言葉がある
ように、芝居でも歌舞伎はかぶき、新派は新
派、新劇は新劇と各々の特色があります。固
定してはならず、広く目を向け、片寄っては
ならないのは勿論大切ではあるが、なんでも
屋では特色がない。それ等を自分の糧とし
て、取り入れどこまでも独自の持ち味を出す
ことに力を入れるべきでしょう。

川柳にもそれが云えると思う。句会などで
多く抜いて欲しさに選者好み、句風に合わせ
て投句する、それもたしかに勉強になること
は知っているが、気をつけないと自分を失う
ことになる。もっと自分を大切にし、鮎の塩
焼のほんとうの味を失わぬようお互に勉強す
べきだと思う。路郎先生は作者の風格を大切
にするよう付焼刃、模倣ではあってはならな
い、持ち味が出せるよう教えられ、又選をし
て下さったことを改めて考えたいのです。



中島生々庵選

NHKテレビ出演(二句)

大阪市 山川阿茶

恥かきに冥土のみやげに出たテレビ
点 点 線になるのを好まない
春雨に赤旗しよんぼりぬれて立ち
チャンネルのとり合いもなく一人世帯
長命で働く事の幸不幸

堺市 高橋千万子

校旗するする歌詞の若草今萌える
一泊にぐち捨てに来た女連れ
花ほめる道で捨て子のニュースきく
ほどほどにむだ使ひして旅たのし
とっときの声でパスした電話口

宝塚市 傍島静馬

安楽死まだこの上に希う欲
家族みな外出させて何もせず
値下りを待てばシユンのもの食えず

威勢よく不仲の隣へ散るサクラ
四捨五入しても仲人すすめかね

八尾市 香川酔々

砂文字の本音は一夜にて消える
石神は抱き合つたまま日脚伸び
水中花女盛りの色になる
喝采が欲しい机で水を飲む
まぼろしの仏は高し雲の峰

大阪市 正本水客

出雲聖寺

老梅の命のかぎり咲いて見せ
無作法にお茶を戴く桜かな
箸紙に上の句があり旅なごむ
琴の音もとだえて月も上りきり
箸置は菜種の茎で春の膳

つかのまの逢う瀬に似たり花の土手
島根市 堀江芳子

ぶじ暮れて明けて喜びわかちあう
児のように待つ夫がいて去に急ぐ
枕からこぼれるように眠りこけ
ひとりいて独りにあらず茶のこころ

大阪市 天正千梢

次男婚約

一目惚れこんな近くに居ようとは
嬉しくて心経の声うわずって
先様へ恩返し嫁を大事にし
今日からは嫁の味方と覚悟きめ
手弁当さげたデイトへ花吹雪

大阪市 児島与呂志

久米雄兄の宅にて二句

先輩の意見にさからう酒の酔い
上客にしてくれた床寝付かれず
倅せが余り男の覇氣も失せ
三度目の正直きつちり念を押し
妥協点見つけそこねている夫婦

青森市 工藤甲吉

所得番付に悪徳ぶり並ぶ
どの党もあてにしてない貧乏人
草の芽をうっかり踏んで詫びを言い
亡妻を恋う郭公が啼くように
歌を忘れたカナリヤとなるやもめ

岡山県 浜田久米雄

進学の子には値上げを言うといれず
お流れをなどと盃まだ足らず
人生はこんなものさと花が散り
失念の舌打ち春のせいにする
踏切は鳴らず静かなスト続く

貝塚市 野坂つき子

天国と地獄を結ぶ地平線
働いて遊んで欲のない女
ものぐさな女になって恋も捨て
欲みんな捨てに女の旅仕度
夕映へ童女のように走り出す

大阪市 阪上十止庵

迎えられるイス深々とおちつかず
追伸に本文がある子の便り
このごろはまたの逢う日をうけ合えず
捨て石にさえもうなれず日向ぼこ
人妻を好きと酔うてもいわぬ齡

香川県 三井酔夢

花吹雪集めままとした昔
樹氷とも見えるさくらは銘を持つ
めぐりあい別れる季節船が出る
うたた寝の娘の手にあるはやせる本
長髪の息子と歩く気の疲れ

富田林市 岩田美代

島袖気品に負けた会釈なり

未完成の恋貯めている華やかさ

春一番菜種が画く風の紋

一電車おくらすつもり芹見つけ

豆を噛むわびしさ とぼけ切りながら

倉敷市 水粉千翁

庭下駄の止まったところで路が伸び

すがりたい人の鼻唄聞き飽かず

もう一度だけ聞いてくれとは嘘の果

美しい流れ深さを呑み込めず

道連れの峠をおかげさまで越し

松原市 谷垣史好

春の宵お前理屈が多すぎる

霊園へ花見 君等も死ぬんだよ

したたかな女 スルメで酒のみ

衰えを自覚した夜が寒く明け

ローソクまで値上げされたよ仏さん

松江市 中川晃男

らんまんの花に合格祝われる

拾い読みしながら新聞配達す

マイホームの夢へ実家が足してくれ

箸もったまんま見とれるいい料理

ネクタイを解いてひとりの夜に戻る

大阪市 本多柳志

時価とあるメニューへ財布たしかめる

コチコチの世相へ許せ四月バカ

入れ替えて淋しくなりし住所録

選挙カー団地は票の山に見え

旅中吟

見学へ講義の長い九谷焼

西宮市 島居百酒

平等にすれば公平気にいらす

媒妁になつてめでたく酔うとれず

迷信と噴った唇を繰る日取り

次ぎつぎとおめでた愚痴となる出費

胃潰瘍つき次ぎ慶事へ引き出され

東大阪市 久米奈良子

高橋夕花さんへ一句

はからずも柳縁を謝す電話口

ゼネストの無人ホームに鳩が群れ

階段を落ちて笑える痛さなり

永遠の別れテールランプを闇に追う

こりもせで人恋う春の花日記

堺市 河内天笑

満開の天に向つて叫びたし

琴の音にのる時落花 蝶となる

しばらくは蝶遊ばせる初ざくら

散る花に女したたか打たれたり

花吹雪そのまま春は亡びてゆく

富田林市 板尾岳人

山男旅の疲れは山で取り

全身で登る断崖蟻が這う
雑草も山の男へこんにちわ
一滴の汗を大事にする男
地から降る雨 山の峰走る

大阪市 大坂 形水

春の叙勲にどうかと思う大臣名
民放のようだとなHK言われ
デパートの休み 車が空いている
総入歯だんねとは女 もうおしまい
文楽の良さが分つてくるも齡

豊中市 橋 高 薫 風

葉玉の中の鳩なり 受験の子
肅然と小野田少尉が見る造花
葉桜はもとより毛虫毛むくじやら
五月から六月へ入る 片思い
落選す 百万言を費して

大阪市 不二田 一三夫

頬のくぼみ いつか頬杖つく癖がつき
虫が走るものに女流評論家
乗客を無視して啞の少女 三人

寄席

おんなトリオ相も変わらざる顔のこと
屋でも夜でも『お早うさん』で楽屋入り

岸和田市 高 橋 操 子

月の傘子供のをもろく消し

キモノショーのかえりモデルのパンタロン
石段を見上げ下から拜んどき
泳がせて追及の目を離さない

出雲市 尼 緑之助

交通ゼネスト

幕末に似てストも狂乱
貼紙はスト 交通安全の立看板
お役所のスト日曜だけは避け
ゼネストのいかり さみしさに変り

高槻市 福田 丁路

狙い定めたカモもさるもの

寝たきりの長寿に悩む日のうらら

黄色い声で闘志満々

革新二候補による京都知事選挙

いやどすえ血で血を洗う知事選挙

倉敷市 本田 恵二朗

口で負けこぶして勝って悔いている

花嫁が焦点花婿放つとかれ

今日一日今日の心で今日作る

ころころところげ続けたこしかたよ

鳥取市 河村 日満

選挙大敗風邪と疲れと金欠と
老い先を考えさせる子の言葉
二十年後の保険アハハと断わりぬ
元の目方に瘦せて退院若々し

条件崩さず老いゆく長女

岡山県 直原七面山

怒鳴ったら命が縮まりますと妻

腹立てて子はブランコを振りつづけ

人を笑わすコッも覚えてもう五十路

神戸市 仲 どんたく

マダムとだけの生涯だった テリヤ逝く

消えて行く路面電車に身をくらべ

御供養もあの手この手の彼岸寺

廃船のここにも暮し おむつ干す

高槻市 若柳潮花

柵吊ってきて何様をまつろうか

噂では添うてた筈を他人でい

吊橋の揺れ面白くおそろしく

しだれ梅札所の春はまだあさく

伊丹市 小川静観堂

花便り岡部伊都子のさくら餅

夕ざれば伏見の酒が卓にのり

寒鼠親子連れにて逃げまわる

非恍惚の人の話を聞く夜かな

愛媛県 渡辺暁童

救われる手も救う手もない末世

気に召さぬのはお値段の料理法

あすのあわれは満開の花

花に心をあづけそこねる

藤井寺市 西 いわを

枯れきった芒 苦惱の色でなし

真実でありたし唐がらしの赤

山の寺菜の花を置き箸枕

梅は散ってて桜はしらん顔

尼崎市 黒川紫香

電話口誰か居そうな音もして

方言がとれて化粧が目立って来

堀くぐる下水花びら浮かせて来

横尾山施福寺

茶屋開かず横尾風が吹きぬける

下関市 石川侃流洞

ベンチみな川止めのようなストの駅

スイスイとストを尻目の自家用車

勿体なやビールの泡のコマーシャル

物価高それでも喰っている不思議

神戸市 小浜牧人

花に背を向けて労働歌をうたう

春の土母の温くみを掌に伝え

情に脆くつくり話に瞞される

二人だけの世界をつくるおぼろ月

八尾市 高杉鬼遊

こいさんがニールックで来る通り抜け

背伸びするピエロは舞台から落ちる

銀行は視線の中で札をよみ

ストできぬ身分が線路歩かされ

松江市 舟木与根一

立ち退きと知らずつばめは巢をつくり

脚線の素晴らしいのが露地へ消え

裸足になりなさい春の芝が萌え

マネキンが着るから素敵と気がつかず

倉吉市 奥谷弘朗

二次会は尻に敷かれた顔でなし

我儘もよし円満の粹の内

愛情を催足される年となり

我慢することを美德にして育ち

桜井市 岩本雀踊子

人生のかげりにゆるむ前花緒

骨埋める故郷に野心すててある

女工哀史雪の峠を越した詩

年少し残す母のうす化粧

八尾市 宮西弥生

おしゃれする女の今日を見てる鍵

鍵穴が案じて待ってる夜の雨

廻り道廻り道して女ごころかも

毒舌を馬鹿になった耳で聞き

守口市 村田瓢太

池の亀彼岸は昼寝もしておれず

スト二日盛りの花を見そこない

ほころび一つよう直せぬに爪の赤

嫁と娘が競って生んで妻忙し

呉市 槇田英詩

下駄のちび母の苦勞を見る如し

石賞でてわれ中年の仲間入り

叱りおく程度にさせる鼻ぐすり

レモンティータがいに愛を探り合い

岡山県 嘉数千代香

控え目な女で母の座はたしか

姿見に生き抜く笑顔ととのえる

ニコヨンの汗へ桜が舞うて落ち

失意空転 心の積木崩れかけ

和歌山市 野村太茂津

小野田少尉婦郷

白布巻く軍刀古式も知り尽す

断腸の思いを部下の死に触れる

青春の袋に全体主義を詰め

古里の試歩へ桜の道を振り

京都市 松川杜的

嵯峨野にて

賽銭箱と消火器と油掛地藏尊

遠く近く弥勒の笑みにあやつられ

市電烏丸線消える

プラタナスの緑を待たず市電消ゆ

本願寺前のカーブをマニア見逃がさず

守口市 羽原静歩

生き抜いて流転の風を聞くばかり

幼稚園

お名前もハッキリ言えて新学期

ゼネスト(一句)

ゼネストの朝も忘れぬコンパクト

湯郷温泉にて

サボテンの斗志あくまでトゲを持ち

富田林市 和田維久子

薬師講当一家一句

伝統を守り続けて心すみ

門出する二人へ心の晴着させ

風雪はこんな気強い娘に育て

本当の答 さがしているしじま

兵庫県 大江秋月

山陰の旅より

大山をバスで眺める雨が降り

皆生には皆生としての湯がたぎり

旅館でも幹事は背広のままで居る

東京にて

宮城の広さを鳩が軽く舞い

大阪市 江城修史

友逝く一句

君遠く失う夜の流れ星

足跡のない人生を子等に賭け

名門の誇り重荷となる暮し

つぶし利く身体が欲しい日の焦り

岡山市 川端柳子

花吹雪未来の娘 そこ ここに

春の陽へ一目散の竹の伸び

もしここでわたしを出せば闇となる

感じよい女でアイシャドー気にならず

大阪市 川口弘生

水茎の跡美しく振られたり

初恋の女の娘の蕨たけて

真似は真似どこか何かが欠けている

浪人の合格ご近所もほっとする

鳥根市 堀江正朗

労われ弱気に気づくこと多し

長寿法こから妻と食い違い

夕ごはん丸い茶碗の音で鳴る

寝転んで相槌をうつ襖越し

岸和田市 福浦勝晴

勲章を貰いましたと胸に提げ

明日あるを信じ二軍で拾うタマ

浮浪者の無気力という寝ざまなり

定年がそこに来ている植木買う

大阪市 小出智子

空の青 貧しきことは思うまい

春眠の地に沁む雨の音を聞く

私の知らない 私の影に脅えてる

息子との旅 友人に言い触らし

大阪市 河野君子

人臭く生きねば此の世をはじかれる

たまにすがれば枯れても男と云う構え

心に棲む母性に負けて春に閉す

かくなれば勇んで渡ろう暗い橋

京都市 都倉求芽

物音もせぬ家さくら盛りなり

夕桜なりを静めて月を待ち

もうせんへさくらが散って人がいず

暮れ残る桜が僕を帰さない

米子市 八木千代

子に同居望まれその夜うるたえる

開発へ民話の池も落着かず

突き放し切れず紅茶を替えに立つ

石の哭く声にもやっと気がついた

倉敷市 野田素身郎

俺に似たのん気な部下が一人おり

微熱押しして左遷の辞令拝受する

たかが風邪ぐらいですまなくなつた歳

君と僕むかしの君と僕でない

大阪市 河井庸佑

下馬評はまたも優勝候補なり

もりあげておいて前篇終わりとし

若いのを相手に年がない仕草

椅子蹴って立ったは自分ひとりだけ

八尾市 大路美幸

浮浪児に下車駅の無い終電車

醒めるのが恐くて浮浪児眼を閉じる

不意に浮浪児春の雲に載る

忘れられそれから浮浪児よく眠る

竹原市 小島蘭幸

クールにクールに生きたし俺も二十六

僕の念力へスプーン曲らず

勝手口から集金も心得て

ストへもうあきらめているズツク靴

泉大津市 村上春巳

一〇円の葉書大層なことを書き

写経する足がそろそろしびれて来

公害の海でくらげが透き徹り

住みにくい世の中犬もびっこひき

米子市 林瑞枝

心地良い素足よ廊下に花も活け

いたわりのふたり自由を認め合い

平行線過去に悔なき人に逢う

待たされて実らぬ恋と知るベンチ

倉敷市 藤井春日

この医師と決めて命ながらえる

子を悟す金釘流が泣いている

夜開く花それなりの幸福う

ご厚志に甘えておこう礼のうち

大阪市 中川 滋 雀

愛着の手垢に擦れた字引繰る
反抗へ節約だけの道となり
逆らえば流れの外に忘れられ
蜚雪の明りを父として諭し

高槻市 山田 季 賛

別居して病気になるただけの損
早寝して朝まち遠し病むベッド
味噌汁の味賞めて病みつづけ
心臓の強さを医師が賞めてくれ

氷見市 関 美 子

瘦せ腕が引く荷車と子は知らず
虚無的にすくうはメロンの二た三匙
恋たべて生きて来ました女の譜
右半分日焼けて陸送車の男

八尾市 高橋 夕 花

細雪はつれし髪に降るえにし
花の種まいて尼僧の恋埋ずむ
三面鏡ゆうべの夢が匂いそう
春愁や粉おしろいの独りごと

竹原市 森 井 菁 居

昼酒を嘔うて苦勞のないお方
葛藤を見おろすコケシの腫がきれい
相性に安心しきっていたワナだ

虹を抱く男愉しい雨に濡れ

倉敷市 松下 梁 水

拳骨が無口な父の道標みちしるべ
ライバルに道をゆずっているゆとり
正体はとっくにばれていた笑い
身勝手な奴だ補聴器外しとる

岡山市 出原 敬 一

この蓄咲けば手形の期限くる
出不精の妻を桜は待たず散り
来年も咲くさと貧乏あわてない
同じ傷もつ顔ぶれが居て救われる

東大阪市 落合 思 月

太陽を知らない花が咲きほこり
御近所へついて行けないからあせり
原点にかえれと祖父は甘くない
又来年咲くとも云わず散るさくら

笠岡市 高木 桃 里

負けぬ気の子が鉄棒へ昏れ残り
嫁がせた部屋の造花は香わない
三目も置かせ課長が「待った」する
アルミ貨が負けて硬貨と同居する

三重県 川上 大 輪

四面楚歌喋れば喋るほどひとり
モナリザ展笑顔に飢えた人で混み
放っつけば泥水でさえ澄んでくる

内職の灯とはだあれも見てくれず

島根県 小砂 白汀

操ったつもりの糸に巻きつかれ
髪梳いておとこ 男を捨てている
後遺症ひよんな形で顔をだし
花作るかぎり人間信じよう

柏原市 大崎 可動

口笛を吹こうか冬の風が去る
妻が走りわたしが走り風すがし
夫婦の手つなげば愛の語となりぬ
てのひらの未来図 白きものばかり

大和郡山形市 森田 カズエ

カレンダーめくれば四月花ざかり
ソプラノで歌うナースの労働歌
クランケのある日味塩みつけられ
縁日の金魚まともなのも混り

米子市 増田 竹馬

生甲斐は真白い紙に自画自賛
バラ色の未来へ二人の歩が揃い
出来た嫁光る実家を口にせず
儲けには遠い仕事に張りがあり

島根県 錦織 文子

ひなを飾って淋しさには触れず
鍵かけた心が愛想笑いする
ここにまた対話の芽あり試歩の杖

心の灯育てるための貝となる

倉敷市 稲田 豊作

一善が波紋を呼ばず沈むなり
倅せは湯舟にひたり般若経
人前で鼻毛抜くほど金が出来
春百花 春の掴めぬ車椅子

竹原市 三宅 不朽

麻痺の子を淋しがらすな山便り
粥のしろさよ臉を去らぬ積童女
世辞言えぬ男のすきなわらび餅
生き抜いてやらねば枕ちかよせる

茨木市 吉川 米子

かけた襷の赤さを愛ととりちがえ
仲のいいほど夫婦上手にばかり合
手ごたえを信じてボール追うみれん
ゆるやかに川面を一輪落ち椿

大阪市 本間 満津子

札つきになれば云いわけせず
無礼講ともに受けて失脚し
着るときに躰の糸は捨てられる
手探って臉に晴着の子を描く

豊中市 戸田 古方

湖西ドライブ (三句)

大津絵のせめて栞でも買うて
日時計のモデル兄弟買うて去に

天王山こっちはけけらけんと言れ

下関市 国弘半休門

散り急ぐさくらではないぞ造花

人形が好きです無形文化財

ひな段を階級意識して見入る

門真市 福島鉄児

真っすぐに戻れば我家の近いこと

仲裁へ傷の深さを知らされる

番台へ座る家業を羨やまれ

城陽市 大鶴喜由

結果から見れば買しめ損をせず

ストリーキングまぼろしの中抜けていく

優等で出たが社会に溶け入れず

名古屋 吉田水車

今朝も今朝何の不思議もなく迎え

蝶々蝶々とまる菜の葉もなかりけり

アベックの話も尽きて夕桜

大阪市 福井野迷路

電話鳴り鍋こげテレビホームラン

投手の掌離れた球だけ勝負知る

空間も時も無限は神のもの

唐津市 新岡回天子

おとと

それぞれに言い分のあるあね

あの子だけ悪いと言えぬ保育園
大好きと名前が書けぬ日記帳

姫路市 梅谿庵不酔

親友の 僕まで連れて 倒産し

日記帖 暗号で書く ABC

一声が 早かったなアと 叩き売り

松江市 岡崎祥月

我儘に育て子供に持つなやみ

感謝する心素直になる心

現職のまま昇給の六十路坂

呉市 林野甦光

マーケットつんばさじきで母が待ち

合鍵を二人で持ってすれ違い

病室のベッドでストをどうのこの

青森県 木村涼人

四、一どんのチャンネルもストばかり

風が出てストらしくなる団体旗

義理固くまだ貧乏がついて来る

大阪市 金井文秋

地下鉄とバスは只です寝たつきり

慶弔に出す事ばかり二人きり

こっちの水は甘いから孫が来る

大阪市 宮尾あいき

誘われて風へこぼれる雪柳

雨の恵那峽

恵那峽は墨絵に似たり雨がすみ

淡路観光

渦潮のここが見せ場とかもめ舞う

東大阪市 竹中肖二

親心届かぬとこへ子が転居

気づつない勤めで手持ち無沙汰なり

云うなれば趣味が八分で良い勤め

東大阪市 竹中綾女

若葉道三三五五と寺目指す

紅椿散りしく寺を雨に訪う

球根が期待はずれの花咲かせ

岡山県 横山一声

長女結婚

大海を無事に泳げと手を放し

ハネムーン送って腰をすえて飲み

ゼネストも出来ず百姓糶を播く

大阪市 神谷凡九郎

生れ 死ぬその道程のややしき

永いお附合いだすナと医者と笑い合う

物云える口があるのに その時

今治市 越智一水

美しい月 美しく僕を責め

腹に涙ためて女よ何にする

選挙権ないのに所得税とられ

平田市 久家代仕男

分校の廃止も知らず桜咲く

牛手放して牛にやりたい草がのび

ホステスの顔に血の気の無い真昼

松江市 小林孤呂二

笑いごとでは済まぬ父にある不足

花一輪古き家風を調えり

春は春なりの色があり物干場

松江市 柳楽鶴丸

コーヒーの野立て楽しい音痴コーラス

家族の笑いが僕の消化剤

小一の作文にヒヤヒヤさせられる

松江市 恒松叮紅

病院に居ても物価に驚かされ

退院してからベッドで寝てる夢

ゼネストの沿線桜見直され

倉敷市 能登原白水

凡夫婦重荷とならぬことに決め

誠めの氷壁父の貌となる

馬鹿となる心もできている余裕

岡山県 池田古心

酒チビリチビリ看に世を愚痴り

金いらぬ愚痴なら合槌打つもよし

此の俺に靈感あればと愚かしさ

兵庫縣 河原みのる

老夫婦見下しセキレイ濃かな

ヒヨイヒヨいと慌てぬ鹿の脚速し

欲捨てて来いとポツクリさん唄い

小松市 馬場魚山

停年後を考え謡曲堂に入り

児童画に似て一色の雪景色

世話役が外気を吸いに座をはずし

宇部市 平田実男

心まで私服になれないのが淋みし

賞めてやることも羨のうちと知り

年金があるから大事に大事にし

東広島市 高橋鬼焼

やがて沈没唄がとぎれる父の酔い

傘のない男の旅だ春の雨

灰皿へ春をためてるひとりぼち

鳥取市 両川洋々

サクラ見に来てまで不意の雨に遇い

先代の遺影三代目を叱り

ストの日の砂丘にて

ストの日の砂丘のんびり鳶が舞い

鳥取県 清水一保

さっそうと我が家へ舞い込む初っぱめ

又一人巢立ってさびしい娘の門出

バイバイと蛍の光にも泣かぬ御世

賢くはないので阿呆になりきれず

云い訳で自分を庇ういやらしさ

癒りそで癒らぬ風邪と根比べ

意心伝心泣かずに外孫抱けと手を

不参者の噂交々同窓会

家買うたローンに若さうばわれる

バスガイド花の名所に唄があり

笹舟に私が乗ってる川の唄

夕焼けを帰る不幸な姉の影

引き際に未練が残る走馬灯

火を落としましたと飲屋素気なし

全快が快気祝のことで採め

お花見も素通りさせた葉瓶

宿浴衣見てから交番道教え

ここからは出るなど歩道の白い線

諫早市 原田明春

尼崎市 高津徹也

西宮市 藤村メ女

大阪府 今西章雅

笠岡市 松本忠三

鯛まぶし俺は昇道したらしい
雑踏が好きで雑路の中へとけ
細くとも俺の選んだ道を踏む

大田市 藤田軒太楼

入智恵があつたか話に骨があり

馬鹿となる日を賢者心得ず

春斗で勝ちとり物価に吸いとられ

倉敷市 竹内翁童

平凡なくらし美しいと知つたあさ

もう君と気軽に云えぬ人の妻

雑草の命もつきし定退日

羽曳野市 塩満敏

春休み終りの日曜晴れてくれ

新しい帽子をきっちり男の子

スト告げるピラが車内にまぎれ込み

松原市 玉置重人

まだ咲いていたい桜へ春の雨

バスガイド雨のクーポン慰さめる

良心がある日私をのぞいてた

大阪市 河股緑水

昨日までの私を旅へ捨ててに行く

温泉に来てまで母は落ち着かず

家巢立つ子の偏食が気に掛り

東大阪市 桑原喜風

初孫を試作のような眼で見られ

狂いなき一矢総理をたじろかせ

縁薄くなる古里に墓碑が待つ

岸和田市 葛城伊三郎

味気なく下戸と花見をして帰り

街中をべたべたと顔写真

二日間しかないが洩らない家に住み

枚方市 宮川珠笑

生活の乱れを嫁いだ娘が叱る

特級を頼み屋台を追い出され

生前を知らぬ先祖の墓洗う

東京都 増田次章

学歴は無用無用と意識する

とげのある言葉あとから気にかかり

万緑の一つ一つが違う色

大阪市 福井多蘭子

借金を固めたような家を建て

句が出来て寝床から見る春の月

一本の桜も春よ散歩徑

竹原市 時広一路

今日の雲明日はどんな貌でいる

愚痴言わぬから幸せだなと思ひ

安心をさせる言葉がぎこちない

兵庫 遠山可住

石油パニックきゅうりも遠慮した長さ

満開の桜の下でストのどか

私有地はここから手入れ行きとどき

大阪 黒田眞砂

七年目の病臥

七年目の油断が心臓氷らせる

又一日死へと連なる夜が明ける

病んで無用の春着次々出来上り

堺 伏見茂美

カーテンを替えたら春の風になり

落葉さえ春の陽気な風に舞い

長谷寺で亡娘の七回忌

南無観世音娘をしばし見せ給え

大阪 飛田好一

吐き捨てるように返って来た返事

断ち切れぬ未練のくさり重すぎる

悪酒

雑布のような姿で酔いつぶれ

島根 榊原秀子

夫婦箸揃えて帰える子等を待ち

訪れる人なき春の暗い雨

生きているし今年の蓬餅

大阪 藤田頂留子

パイとパチンコでスト休みもてあまし

春闘のお次 値札の衣替え

一と雨に花の命の美しさ

檀原 岩井本蔭棒

影響があっても無くても困るスト

親方は日の丸という大あくび

口下手の分まで妻のいい愛想

鳥取 川崎秋女

好景気匂わず隣りの自家用車

メッキとは知らず愛した日々惜しむ

我慢にも限度トースターのパン跳ねる

松山 谷のぶお

集金に行つて一票頼まれる

信心もかねて桜を見て廻り

蘭匂う玄関で書く領収書

岡山 永宗宗義

老人の行く当てもなし日向ぼこ

決断を入れるポストへ来て迷い

制服の下で青春が駄々をこね

今治 原田一風

蜜柑から 橙 伊予柑 春近し

お互の寝顔を貶す老夫婦
石仏の膝に藪は来て溜り

宿毛市 瀬田美知

子をさがす犬の乳房をもみほぐし

母子草父の事へはもうふれず

女一人時にあぐらをかいて見る

宿毛市 山本窓花

生きてゆく限りを店舗の灯にたくし

モナリザの年に笑えぬ夫病む

ビニールの袋で玉ねぎ新芽伸び

大阪市 鈴木生仏

桜見の来客地酒ばかり褒め

物価高ばやいてダイヤの指輪買い

子沢山仏に愚痴の未亡人

仙台市 川村映輝

嫁く娘へのはなむけ夫婦で考える

珍らしや先月と同じ理髪料

物真似に似たり生命なき造花

貝塚市 行天千代

亡夫七回忌一句

気の強い妻で有ったを亡夫に詫び

孫抱いて生きてた喜び噛みしめる

三十年ヤツと握った母と子よ

里帰り生憎父も母も留守

既製服サイズピッタリ買わされる

生返事やっぱり握りつぶす肚

大洲市 堀内曉風
神戸市 佐々木静泉

卒業式一句

涙する子も減ったなあ 卒業式

感情のもつれへ追いうちかける酒

狂乱の世だからよけい花見する

寝たきりの恩給つきの身を庇い
出雲市 原 独仙

春闘

スト妥決葉桜でよし飲めばよし

球審のようにはいかぬ娘は二十才
新宮市 大矢十郎

善人の過信四方が敵だった

胃の痛みなおると今度は風邪を引き
倉吉市 渡辺苦句

病い治癒先ず手始めにめしを炊き

諸々の話しがついた酒の味
笠岡市 出原真奇

裏切った男ひとから今は月給かね貰い

鳥取県 鈴木村諷子

末弟に親を見させて名士なり
献酬の攻防戦の膳につき

大阪市 西川 誓 二

小一の書棚にエンサイクロペジア
冥途へ行けば両手つき度い親不孝

東大阪市 斎藤 三十四

生返事へ日を改めた顔が来る

生甲斐を問われ六〇才は口ごもる

大阪市 柳 原 静 香

ゼネストの余波はここにも市場籠
シャム猫の自由がほしい目と出逢い

大阪市 津 守 柳 信

嫌な日は嫌な事だけ思い出し
腕一本頼る技術にある自信

守口市 野 呂 右 近

冷凍の魚をもどす春の水
義歯磨きながらお早よう言える仲

北川 春 巢

大阪市退職(四九・四)

再出発へ花笑い鳥歌い

退職は孫が三人ふえる年

肩書きがとれたを犬も知る如し

働き蜂だったとつくづく振り返り

退職金銀行恐怖症になり

川村 好 郎

桜咲き散って吾れに今日があり
静かなる対決 愛のもろさよ

妻にさえ心と別な言葉振り

結論が出せぬ相談まだつづけ

春闘のからくり福祉の旗も振り

西 尾 榮

たのもしい後輩があり縄のれん
いささかの旅愁となった通り雨

とびとびに読む縁起 彼岸の鐘が鳴る

血圧の注意のままに花の旅

土ついているみやげはきつう喜こばれ

菊 沢 小 松 園

戦争を知らぬ軍手の汚れよう

用の無い指が性書を離さない

人の言葉を覚え不幸な鳥となる

信んじないから後光など見えず

金の要る話へ毛細血管震う

若 本 多 久 志

豊かなる生活はかなし石油危機

青信号のんびりと待つ齡となり

激変の世にキャリアが役立たず

罵った商社へ次男就職し
髪染める友の話にふと淋し



川柳塔社創立十周年
同人句集発刊記念
— 路郎忌川柳大会 —

日	昭和四十九年七月七日(日)
時	正午開場・午後一時締切
会場	大阪府教育会館新館四階大ホール 天王寺区東高津町一二の二(但し上 本町六丁目交差点東北百米) 電話761170六六・七〇五〇番
司会	西田 柳宏子
開会の辞	若本 多久志
挨拶	中島 生々庵
柳話	川村 好郎
兼題	西尾 栞選
	岡橋 宣介選
	三条 東洋樹選
	福永 清造選
	堀口 塊人選
	増井 不二也選
	金泉 萬楽選
	中島 生々庵選
席題	(二題当日発表) 菊沢 小松園
閉会の辞	
会費	五百円 (共に記念品呈)
投句料	三百円 (閉会後懇親宴・会費千円)

会場変更

にご注意ください

大阪駅、または天王寺駅から環状線でお越しの方は「鶴橋駅」で、近鉄線ナンバ方面行きに乗りかえ、次ぎの「上本町」で下車。路面北側に出てくださいとスグわかります。
大阪駅から地下鉄でお越しの方はナンバ駅から近鉄線に乗りかえ、「上本町」下車。上本町とは上本町六丁目近鉄百貨店のあるところ。地方の方でわかりにくければご説明いたします。
(ふるってご参加ください)

お買物は
4都を結ぶ
大丸へ!





鈴木 黄
(医師)

〒108 東京都港区白金台4-12-11

俳風柳多留廿五篇研究

一(二一)

八木 敬一・鈴木 黄・紀内 恒久
室山 三柳・青木 迷朗・入江 勇
西原 亮・清 博美・岡田 甫

23 しっぽりと和尚のくやみなれた物

八木―おくやみの言葉は、素人はなかなかうまく言えない。そこへ行くと、和尚はさすがに商売柄馴れたもので、しっぽりと上手に言う。ところが、このおくやみ、一步間違うと後家くどきになる。御用心、御用心。紀内―賛。全く、くやみはむずかしいもの。落語にもこの種の噺多い。

青木―賛。上五「しっぽり」と下五「なれた物」の措辞から、礎稿後半にいう「口説」が連想される。

西原―礎稿の前半に賛。「後家くどき」云々には反対である。くやみを云うのは、死んでいくらもたためぬ時である。こんな時に、手あたり次第にくどく「色和尚」までは考えすぎというものである。「商売なれたもの」程度の解でよい。

室山―同。餅屋は餅屋。清―同。「しっぽり」の語を現代風に解釈す

ると間違う。

岡田―同。「しっぽり」は、この句では殊勝げにしんみりと、である。

30 てきはきとした雨の降暑(マコ)の事

八木―ザラッと来てからりと晴れる。夏の夕立は、まことてきはきとしたような雨である。

青木―「てきはきとした」は、めりはりのある江戸ッ子氣質を天象に仮託して表現したかったのであろう。

西原―「てきはき、物の速にかたづくをいふ」(『俚諺集覧』)。あつという間に晴れるのである。

岡田―同。

31 二百十文がかさをふきおられ

八木―二百十日の大風で、二百十文で買った傘を吹き折られてしまったという句。二百十

文で二百十日を暗示しただけのもの。

くら宿へ式百十一日にゆき
やね板をふみく覚へませぬ風
九・27

青木―賛。
二百十文が松皮おやじ買ひ
安七・信3
(台風で破損した柿葺屋根の修復をするため松の皮を買う)

西原―賛。傘の価も二百十文に近かったのであろう。そうでないと、コトバのあそびになり、とっぴすぎる。

清―傘の値段は関係ないと思う。あくまでも言葉の遊び。

岡田―同。二百十文は二百十日を暗示したままで。

32 門の立まで八風来人で居る

八木―浅草の風雷神門(俗に雷門)は、明和五年に焼けてしまい、今寛政の世に再建中

あるが、門の出来あがるまで、風神・雷神の二神像は、ちょうどその語呂合わせみたいにして、風来人……浮浪人のようだという訳である。

かみなりと風が観音ひらきなり

三一・三三

紀内一時事吟説に贊。

青木一贊。風神・雷神を浮浪人に見立た所が

ミソカ。

岡田一同。

33 三夫婦の内たん／＼に夜が明る

八木一息子・おやじ・おじいさんと三代の夫婦が住んでいる家では、若い者から順に朝起き出してくる。

封建時代、家族制度のやかましかつた頃は、若い者から順に早く起るといふような順序は、嚴重に守られていた。生理的には、年寄りは早く目をさますわけであるが、それとは別である。

さなきたに花よめ寝こいさかり也

九・三〇

などと、いつてはおられないのである。

紀内一贊。しかし、小生は目をさます順を逆に考えていました。

青木一礎贊。三夫婦のうち、一番先きに起き出すのは年若の嫁であろうが、目覚めは高齢の順に違い無く、その順逆の面白さもさることながら、三夫婦も揃っているとなれば、家族の頭数も多い事だろうから、皆なが起き出す頃は、さぞにぎやかな事だろう。その序章

暮明きを「だん／＼に夜が明ける」と表現した所が手柄か。
西原一小生は紀内氏と同じく、目の覚める順と思う。すなわち、年寄から目覚める有様を述べただけと思う。

入江一同。長寿の家で、祖父・父・子と三夫婦健在。年寄の順から目が覚める。

清一同。それで若夫婦が困る。特に嫁が。

岡田一同。

34 あちちから喰付そうな松魚也

八木一初鰹は鰹の姿もいい。魚売の威勢もいい。ぐずぐずしていると、向うから喰付きそいな勢である。

初がつは飛ぶがごとくに通町

一一・一五

初かつはかついだままで見せて居る

一〇・一九

青木一鰹も魚売りも威勢のいいところが身上である。「あちちから喰付そうな」がいいえて妙。

入江一同。鰹売りの鼻息の荒さを「喰付そう

な」で表現。鰹の表情も「喰付そう」にいきいきしている。

岡田一同。

35 盗人八虎と熊とで名が高し

八木一支那の陽虎と日本の熊坂長範は、盗人として有名。虎・熊といかにもこわそうな大どろぼうのような言葉でまとめた句。

青木一贊。

虎の後熊と和国に名を残し

八一・一

岡田一同。

36 見世をはらせる八ばら／＼扇也

八木一江戸町一丁目、扇屋平右衛門見世は、本句の当時は大見世であり、この見世には、有名な呼出、花扇がいた。呼出は張見世をしない。「見世売りハせぬ扇屋のあふぎ也」(四五・四)という句もある。

また、扇屋には本句の時代、他に三・四軒の分家があり、それはすべて中見世以下で、そこでは見世を張った。複数の分家をひくくため、ばら／＼扇といったものであろう。ばらばら扇と張るとの縁語仕立でもあろう。紀内一小生は八郎兵衛見世と考えていました。

青木一礎稿然らんか。細見による考証他目を期待して居ります。

室山一花扇に比べると、他の遊女は「ばらばら扇」である、というだけであろうか。

岡田一八木氏に敬服。従って句解は、有名な扇屋といったって、花扇は張見世に出ない。張見世に出ている遊女は、正月年始用のバラバラ扇と同様、ガラクタ扇ばかり。

岡田甫著

好評増刷出来

川柳東海道 上下

各冊八五〇円(千一四〇円)

書店でご注文をノ

読売新聞社

鼻の珍太郎

東野大八

このほど再会実に約三十年ぶりという友人が私の前に現れた。こんなとき、男というものは、あつけないほどサラリとしたもの。やあ やあ やあ

たがいにそっくりあって、片手の会釈を交しあい、肩を並べて電車の切符売場に向う。長身のすらりとした、シックなダンディぶりは今とても昔の通りだ。殊に一きわ似合うのが黒いベレー帽だ。

「帽子嫌いの君が、ベレーとはね」

歩きながらの久方ぶりの第一声がそれだ。「いやあ、あんたにあうので弘前を発つときに奮発したのさ、頭が生地丸出してわれながらみられたもんじゃあないからね」

相変らずのアクのきつい東北弁のこの相手「着てみると万更でもないだらう、どうだあんたものつけてみちやあー」

私は苦笑して鼻先の空気を払うような手つきをしたあと即座に答えた。

「おれはベレーなんぞ大嫌いさ」

相手は相好をくずして、相変らずだなあ、

といった眼つきをあたたくほころばせる。

電車に並んで腰をかけてやっと話になる。

「少しも変つてないなあ、一目であんたもパツチリだよ」

「ベレーをのつけた君の顔も少しも変らん—むかし北京の飲み屋の昼の酒で、お酌の若い仲居が—まあ、なんて素敵なお鼻、—そういつて絶句し、しげしげと君の鼻に見惚れていったつが、今日の三十年ぶりの出会いも真つ先にモノをいったのはその鼻だよ」

彼思わず苦笑してつるりとその鼻を指さしてみせたことだ。彼のことを、むかしの北京では、鼻の珍太郎」と私はニククネームした。珍太郎という変わった名も、レッキとした日本政府に登録済みの彼の本名なのである。彼のあだ名は、実をいえば珍をカタカナにして、彼の陽物にカケたわけだ。男の鼻がその男性の象徴と比例する、わけではないは当方の知ったことではないが、若いころ年増女も見惚れた鼻は、むかしも今もいささかの衰えもなし。あさ黒く引緊った丸い顔全体がよくバラ

ンスをとって唇の上の中央部へムリなくスタミナ充分にせり上っている。涼しい大きな眼がよくそれにつりあっている。男の魅力がまもキナ臭くふりまわっている。女盛りならずとも妙ないろけをそそりたつその鼻は、老境の今とてもちと毒気が過ぎるようだ。三十年ぶりにこうして並んで揺れ合っている相手の身体ぬくみはついと、この鼻のせいかもしれないと私はそう想わざるを得なかつたわけだ。

電車は駅毎に乗客の頭数を増した。おかげでわれら二人は言葉もなく、ただぼかんと揺れ合っている。三十年ぶりの再会という手応えのありすぎる程の歳月が、かえってこういう場合は、黙りこくって肩を並べあっている方が、より充実感をおびているように思える。きつとこの相手も、私同様、遠い過去の青春期を彩つた大陸生活の思い出の一つ一つを、たしかめ味直していたにちがいない。彼は北京の日刊新聞社の有能な第一線記者だった。しかも彼は私のいた新聞社のライバル紙で、同年の若い記者であつた私にとつても、職務上当面の最強のライバルでもあつたわけだ。

北京でそうだ、あれは東交民巷の、外人経営の茶房の一角だつた。エキゾチックなカンドリエのさが天井と、ピンク色の貼り紙の壁をそこに淡いオレンジ色の光りを這わせたその薄暗がりのボックスで、私はひとり背後のテーブルの男女の会話をきくともなしにきいていた。

「あの部屋の鏡の中にみた、君の脚はキレイだったよ、素敵だったよ」

「素敵だったのは脚だけなの？」

「いや、何もかもさ」

「じゃあ結婚して、ね、おねがいー身体だけじゃあイヤなの、結婚なのよ」

「結婚？いいじゃあないか、そんな七難しいこと。このままでも同じことなんだよ」

「私、もう二十六よ、身体より結婚の方が大事なの。もう私には時間がないのよ」

「しまったな、なぜ五年ぐらい前にあんなかったのかなあ」

こんなやりとりを書いてみると、まるでフランス映画のシナリオみたいだが、残念ながらナマの声で耳にすると、男の方はひどい東北ナマリで、折角の女の殺し文句も受けてたつ段になると、陽ざかりにほうり出された若いみずみずしいにピンカラシャラリンと妙なアクセントの抑揚ではねまわり、至極ユーモラスな感じさえうける。

(珍太郎奴、やっとなる)

私は男の声音でいち早く彼とみてとっていったわけだが、女はさて誰だらう。会話のしおどきを見て首を伸ばして後のボックスをうかがうと、白い女の貌がこちらにむき出しにみえた。懸命なところだけに、さいわいにもさしのぞくこころの顔には気づかない。チラとみた一眼の感じでは、当時人氣のあったフランス映画の女優女優シモーヌ・シモンにそっくりだと思つた。薄暗がりの、俗にいう夜目遠目で唇と丸いあごのあたりが仇氣なく上に

しゃくられて、大きな眼がやけに光って、すべすべしたおでこの下で見据えるポーズがやけにセクシーだ。ひたむきな女ごころの迫力こそ、女を一段と際立たせるものはない。情事一夜のそれは後だけに、ずっしりとしたおんなの肉の重味さえそこに漂っている。

(すっかりやれよ、チン太郎！)

そう心の中で真顔で激励しているこちらさんも、何を隠そう相手の彼女こそいいないが、昨夜はこんな二人と同じそのままの夜を過したばかりの男だったのである。

そうして三年後、私は戦傷し現地の北京で復員し、やがて終戦。そのあと帰国のために天津貨物廠へ、妻や家族たちと集結した。そうしたあわただしい日僑俘の抑留生活の中である日、突然に鼻のチン太郎と再会した。

だが、その再会のチン太郎は、とんでもない珍太郎であった。彼は十人ほどの奥さん、婆さんの群が洗濯場の一方で、赤ん坊を背負い一心不乱に石鹸の泡を八方にとばして敢斗中であつた。遠りすがりにその姿をひょいと捉えたこちらだけに、とっさに「おい！」と声をかける。「おう！」と相手はこちらをみると、それだけのことで洗濯に夢中だ。私はとっさに、眼のつり上げた懸命な相手の顔に気おされて、じゃあまたな、と片手をあげてそこを離れた。その別れの一べつこの眼の底に彼が昔の赤ん坊を大きく一ゆすりして、何気なく両手で押しひろげたのは、まぎれもなくそれは女用の「サルマタ」に相違なかった。

「君との最後の別れは、天津貨物廠の洗濯

場だったよ、覚えてるかい」

電車が着いて、次のそれからのバスを待たねばならぬ広場で、私はそう問いかけた。

貨物廠で……？

相手はキョトンとして、口の中でそうつぶやいたが大きくかぶりをふっていった。

「カケラも覚えてはないよ、だって女房がああとき危篤でも、赤ん坊だって重症の病人でねえ、死ぬ程つらい抑留暮しだったからね」

プ然たるその述懐に、私もプ然たる顔つきで黙った。そして忽ち胸のうちに首をもたげたのは、彼の女房は、あのシモーヌ・シモンだらうか、ということであつた。

私の家に一泊し、心ゆくばかりサカズキを干し合つた二人だが、ついに彼が上機嫌で私の家を発つていくまで、シモーヌ・シモンの一件についてはおくびも口に出さなかつた私であつた。三十年ぶりの再会も、相手が女でなくってよかつたな、これを三度もくり返した鼻のチン太郎君であつたわけだが。

清水美江傘寿祝賀記念

第十回埼玉川柳大会

日時六月三十日午前十時から埼玉県立労働会館大講堂で開催。投句者の題一技術家・鳴かず飛ばず・蔵書・一つ椅子・数字・街の灯・忘れ物一投句三百円。締切六月十五日。〒336 埼玉県浦和市常盤九一四一六、武藤かめ吉方。

(句箋無記名)

吉川雉子郎(英治)先生と

その川柳

若本多久志

私の尊敬する何人かの人物の中に、吉川英治先生がある。

どんな境遇の中にあっても、常に厳しく自己を見つめて生活してこられた人：「我れ以外、皆我が師なり」という、自からの言葉や信条に、若い頃は勿論、作家として名を成されてからも、なおこの謙虚な態度を崩されなかつた人：もの哀れを知り、すべてのものに思いやりの深かつた人：として私の脳裏に深く刻まれた人物である。

その上、嬉しいことは、日本に文化勲章の制度が出来てから、既に百数十人かの授章者を出しているが、授章の感激を川柳で表現された唯、一人の人として、同じ川柳の道に精進する我々には、暖い親近感さえ抱かせる人である。

菊の日も一度紺がすり着てみたし

これが、昭和三十五年秋、文化の日に授章された喜びの中で、ふと思ひ出された少年の日の、一番悲しかったことへの詠嘆であつたのである。

そのことは、彼の自叙伝の中で

「父が最後の望みをかけていた訴訟に負け、時から、三日目か四日目に、親戚の世話で、川村印刷という、ほんこ屋へ奉公に出ることになった。丁度私が十四才の頃である。

今でも忘れられないのは、幼少から着なれてきた紺がすりの着物を脱がされて、丁稚さんの着る縞の着物に角帯をしめさせられたことに、何とも言えぬ悲しみを覚え、便所の隅へ行って、おいおいと声をあげて泣いた」と記しておられる。

このように当時の吉川家は、売り食い生活も氏をつけて、母親の賃仕事や僅かな英治先生の給料、それに長女、次女の奉公先からの前借金で、窮乏のドン底生活が四、五年も続いた訳である。

後に、その頃を追想して詠まれた句に
貧しさもあまりの果ては笑い合ひ
泣きに來て泣けずになりぬ春の川

妹 弟連れてさびしい兄の顔

などがある。然し、父親が病床の人になつてからは、一層生活は苦しくなるばかりで、

「ある夕方、母は蚊のうなる台所に腰を下ろして、ぼんやり溜息をついていた。途方にくれた顔つきだった。母がそんな眸でいるのは何を意味するのか、僕にはすぐわかつた。

晩に食べるものが無いにきまつている。僕は母を慰めるつもりで、何かあてもないことを言つたようだが覚えはない。唯、足を早めに家を飛び出した。

それから間もない後、僕は郊外の真暗な傾斜地に立つていた。眼下に大きな池があり、池のふちまで馬鈴薯の段々畑が続いている。

星の光がすべて、神の眼か世間の人の眼のように見えた。罪を意識しながら、犯行に出るまでには、恐ろしい闘いが自分の中で動悸していた。

(それだけに、私の過去の中でも、このことは強く鮮やかである)

その晩、飢餓の一家は、塩ゆでの馬鈴薯をふうふういって食べあつた。

病床の父は勿論この盗みを知ろう筈もなく、母にもその行為を叱られた覚えがないの盗みを許容していたのであろうか。僕はこの時ほど母親をいとしく思ったことはない」と、自叙伝にも記されている通り、貧苦の中でも、母親の愛情をヒシヒシと受けとめておられた点に心引かれるのである。

格子拭く母をうしろに夕へ出る

お母さんと呼んでみし用もなけれども

世の中におふくろ程の不仕合せ

おふくろは俺におしめも当て兼ねず

母あらばなど想う日の梅うらら

母を詠まれた句はたくさんあるが、茲ではこの五句だけを挙げておくが、とにかく信仰にも似た思いで母親をみつめておられたことは次のエピソードでもうかがえるのである。

「僕が毎夕新聞に入る前、売薬会社の広告文案係に応募した時、行ってみると、大学出の立派な履歴書を持った人が多いので、僕のようにならざる者はない者だと思った。然し、やがて順番がきたので面接室へ入ると、その支配人みたいな人が、テストをした最後に……あなたは宗教がありますか、と聞いた。僕は考えてみると、信仰も宗教ももっていないことに気付き、その通りの返事をした処、

……わたしの店では宗教の無い人は採用しないのです、と言って、それでおしまいにになりました。僕は何か引込のつかない若気の気持で……いや、宗教はありませんが、母がいつも自分の胸の中であつて、僕は母を思い出す時は決して悪いことはしませんし、お母さんをお願い出せば勉強せずにはおられません、そんな信仰ではないけれども……と言つたら、その支配人は笑っていたが、数日後に採用通知が来て驚いた。

それが何十人内であった一人だったと聞き、一層母親のおかげということをしみじみと思つた。(吉川英治対話集から)

吉川英治先生が、どうした宿縁で川柳の道へ入られたかというところ、横浜ドックの船具工として働いておられた時(十九才)作業中に足場が崩れてドックの底に転落、瀕死の重傷で入院中、いろいろ将来のことなど考え、退院を契機に、父母の許しを得て、苦学する目的で上京され、下谷西町の髪結いさんの二階、三畳一間を借りて、昼は労働、夜は勉学を続けておられた頃、当時、日本新聞の客員として少し名前の売れていた井上秋剣氏が近所に住んでいて、江戸文学の研究について教えを受けておられたのだが、この人があの有名な、明治革新川柳の先駆者、井上剣花坊氏で、必然、川柳の手ほどきも受けたものと思われるが、上達も早かったのか、剣花坊主宰

の「大正川柳」の幹事となり、「川柳隅田川考」を執筆されたのが二十三才の頃と聞く。

この「大正川柳」や「新川柳」という同人誌にも吉川雉子郎の作品は多く見られ、外に、若き日の川上三太郎氏、高木角恋坊、近藤節三坊、花又花醉氏らの名も見られる。

この頃、英治先生は既に両親を東京に引取って生活を共にしておられた様子だが、生活は決して楽でなく、勉学の為にもより多く収入のある職業へと転々せられ、毎夕新聞へ入社される迄の七、八年間は、活版工、行商、大道商人、土工、人夫、あんま、漆器の下絵職等覚ておられるだけでも二十余りの職に就いたと語っておられる。

昨年九月、当社句会の柳話でお話した「百科辞典を五十回読まれた」というエピソードもこの時代だと思つたが、ひたすらに本を読み、ものを書き文学の道に研鑽されながら、句作にも熱意を注がれた、雉子郎得意の時代でもあった様子は次の句でもうかがわれる。

何尺の地を這い得るや五十年

この先を考えている豆の蔓

どう生きてゆくらん蝶の行くえ哉

きりぎりす半分啼いて風がふき

あめ土の中に我れあり一人あり

生きよか死のうか生きよか春臘

生きている証拠に飯を食っている

露の玉どう転んでも露の玉

閑々と蠅を叩いていたりけり
古机の夜半の中なりわが机

踏まれてもふまれても菊咲いている

これらの句をジッと味わってみると、「川柳は人間陶冶の詩なり」と叫べられた麻生路郎先生の若かりし頃の激しさを感じるのは、独り私ばかりではないと思う。

大店の傘を出し切るにわか雨

蛭かご心配そうな光りかた

小鳥店買われゆくのど鳴き交し

田舎新圃に久しき雅号なり

店先に一つ落ちてる果物屋

寄席へ来て寄席芸人の身を案じ

小便の先を曲げるよ春の風

今朝も又一字も書けず納豆汁

男親死んで見せたのかも知れず
父の袷いつしか可笑しからず我

又父の話お膳が片づかず
空屋の窓に日干しのきりぎりす
みなし子の独り覚えた笛を吹き
柳原涙の痕や酒のしみ

(柳原は東京柳原・昔古着屋の多かつた町)

以上、私の手許にある四百句ばかりの中から好きな句をご紹介した訳だが、亡くなられた川上三太郎氏が、その著書「川柳二百年」の中で、

初日の出哀れは餅が売れ残り

という雉子郎の句を紹介して、「この句は、あの関東大震災の直後、上野公園の入口でスイトンを売っていた頃の彼の句だが、今でも当時の姿が目に見えようだ。

この頃から、彼の「雉子郎」という名は段々うすれて「英治」という小説作家としての名が世に現われ初めたのであった。しかし、

雉子郎の名はうすれても、彼は川柳からは離れなかった。そして晩年まで川柳家のめんどろをよくみてくれたものである。

彼が亡くなった時、私は入院中だったが、私も彼の後を追って死にたいとさえ思っくらくらくいやすかった。それほど、青年雉子郎の川柳は光っていたと思う」

と述べておられるが、私も雉子郎時代の川柳には「これこそ川柳だ」という人生哲学がにじんでいると思うのである。

更に、私ごととき者が吉川文学を論ずる資格もないが、あの多くの作品の中で、それぞれの人物に語らせておられる「人生の言葉」には、万人畏敬の名言金句が宝石のようにちりばめられている。それを思い、これを考える時、私の吉川雉子郎、即英治先生への尊敬の念がいや増す昨今なのである。

近作

純 垂 鷲 高

桃太郎の血はどうしようもない鬼退治

抵抗をする現実には生く歴史

歴史はつづく消えたり現れたりするいのち

昔も今も雑草忘れ去り

男は男女は女の歴史あり

親という悲しい末路を知るや君

老友へ生きる証しの雑電話

父に似る子に似る孫にまで似るな

手探りでなんでもしたい空を舞う

隔性遺伝係に及ぶと他人は云う

空気が地球使い棄てたら何処へ行く

壁を破れば壁壁を破れば壁壁

「旅人」以後の

麻生路郎作品

— 30 —

三十七年六月号 (不朽洞句帖)

お見合いに映画批評は負けていず
社会党今日もケネディを料理する
夫らしいのが摺り切れた背広着て
自家用車もう奥さんに飽きられる
成金の夫婦揃ろって音痴なり
外人に云わしゃゼロの日奇蹟なり
全学連わが道を行く 兄おとと
停年に聞けば再婚すると云う

停退にホントの彼か 無口なり
短歌にはまだお色気が残って居

悼 夢考

北の雲君をときして去りにけり

本社五月句会「十字架」

十字架の下に名も無く眠りいる

十字架胸にすましてる姉

杏林川柳会「手不足」

男手でおむつしかえるのを見られ

大阪通信病院川柳会「逃げ腰」

逃げ腰のマダムいよいよツンとする

南海電鉄川柳会

社用なのに又脱線かと訊かれ

今治市 月 原 宵 明

作

もみ手して自分の不憫消してやる

貧しいと言われたくない詩を作る

蝕んだ働き蜂の五十肩

気のかかぬ電話ピカソを描くメモ

大洲市 米 沢 暁 明

反省をしたかに見えた二三日

お巡りをまだ先生と呼んで過疎

電話では言えぬとあって来れば酒

岐阜市 市 川 鱗 魚

過去言わぬ男に天と地の広さ

太陽がある農民の笑う顔
結論は小声になって金のこと

東京都 池

口 吞 歩

あっしには関わりもなくモナリザ来

モナリザに浮かれ福祉はほっとかれ

モナリザにかぶれ気取った貌が殖え

今治市 長

野 文 庫

馬鹿気てはいるが常識についてゆく

盛り塩を未だ続けて小料理屋

スキャンダルはねのけて出る実力者

うまそうな顔して食べるコマージュル

近

(傍 島 静 馬)



川村好郎選

弘前市 小山内 貞 男

雲にのり青い地球を見たくなり

トップきる風はきびしく頬をうち

人生を歩として渡り心足る

宿命と諦められる幸を知る

東京都 山 根 白 星

キリストも目を伏せ給う多数決

目も絢に今日大安と知った厭

諍いはままある父の衣紋掛け

考える人のホーズの猿も居る

羽曳野市 麻 野 幽 玄

武器を持つ国に平和を支配され

したきことあれこれ生きて居る証拠

肉身のエゴを他人が庇うて呉れ

振り返る度に角度の変る墓碑

岡山県 長 尾 保

食べて寝て働くだけの素顔です

コンパクト女の私語を聞いている

横着な主人と見抜く鉢の松

くたびれた靴どん底に耐えている

三重県 川 上 富 子

言いかけてふっと他人を意識する

他人様を助ける嘘が言い出せず

バラ枯れてなお女王としての格

姿見の私はなんといらだたし

八戸市 安 田 勝 己

年金に縫ればストのツマにされ

掃き捨てるように倒産数えられ

「十和田、八甲田観光除雪貫通」

春掘って雪の回廊息吹きする

思い出し笑いを犬に見上げられ

高槻市 竹 内 花代子

着る物も歳と一緒にずれて来る

日本庭園にて

松の葉の葉末に春の雨光る

春雨へ茶室の琴と鶯と

水染めて動かぬ鯉の群へ立ち

鳥取市 勝山 紫宏

始めての和服やっぱりもう娘

春雨がしっとり通夜の闇包み

下心あつて笑顔がきこえない

スト出来ぬ底辺に居て残業し

尼崎市 中谷 利美

皮肉ったつもりなんやと呆けられ

変人のよさ妻だけは知ってくれ

墨滲むそこが値打ちの書道展

心境の変化禁酒にさらば告げ

和歌山市 吉野 富子

運命とは悲しい時に持つ言葉

約束へ女微熱の朝を出す

忘却へ風のうわさに耳を伏せ

信号無視して来たような過去でした

守口市 岸本 豊平次

戸惑いを自動扉が引き受ける

物価高親父の収入にも触れる

元就の教え羨む核家族

マジックで無造作に値上げされ

和歌山市 井上 マサ子

石仏名も知らぬまま子の供養

だらだらの政治に主婦連立上り

好きだよと一度も云わぬうちの人

スト続き働きばちに重い春

和歌山市 樫村 ふみよ

物忘れ手柄話にするも年

だらだらと来る商談にいつも負け

好きな仲割いた四厄と言う言葉

髪をすくこともよろこび病み上がり

和歌山市 秋月 宏方

太古から楽譜は変えず波の音

姑と仲よい嫁の低い鼻

役所へは通る代書のへたな文字

備前市 武内 雅堂

言い負けて尻っぱを巻いた犬である

舞うこともおぼえて蝶の屋下り

喪服からおんなの性が滲み出る

大阪市 堀口 欣一

師の手紙綿々として国憂う

さよならとも言わずに消えた宮田輝

社風なお生きて封筒裏返し

名古屋市 大

林 曲ん手

流木の漂う如く世を渡る

見返してからの心は静かなり

この辺で折りたい語尾が定まらず

石川県 同

村 花仙人掌

辞めますと金の卵の高姿勢

色あせた造花トイレへ左遷され

可愛げのないオール5の隣の子

大阪市 新

川 貞 祐

気やすめの瓶ぐすりのむ勤勞譜

三寒にやられ四温に熱を出し

揺り椅子の無職の部屋に嵩高く

大阪市 平

井 露 芳

金比羅さんうどんで味の旅もさせ

石油危機はや日本が沈みかけ

春の雪風邪を引きそな象頭山

泉佐野市 大

工 静 子

約束を果した顔で花を見る

病める日初めて夫素直なり

河工事休憩ばかり目にとまり

愛媛県 小

山 悠 泉

出不精な母がお産へ狩り出され

民謡を一つ覚えた旅戻り

アイドルの写真机に受験の灯

新しいものへ世間の風当り

ライバルを越して嬉しさ虚ろなり

籠の餌のおこぼれ拾っている雀

岸和田市 池 田 香珠夫

健脚がいのち団地のご用聞き

おしどり夫婦とよそ目に見えるだけ

庖丁のリズムで知れる荒れ模様

伊丹市 榎 谷 漫 柳

半分は親の夢負うランドセル

上がるから上げるんだよと小売店

質上げの記事は横目の経営者

今治市 真 山 国 彦

ポックリと逝って善人だと云われ

ガソリンの値上げを知らぬ行楽地

物価高愚痴云うひまに稼がねば

今治市 古 野 伶 人

販路拡張やと果して品不足

髪梳いて白髪に朝の気が滅入り

生かされている身不平は云うまいぞ

兵庫県 高 橋 近 江

雑草のここにも春陽惜しみなく

主婦業に昇給のない独り言

公然と主婦にもほしい交通費

鳥取県 林 露 杖

絵幀を担ぎ初孫抱きに行く

怒ることできたあの頃懐かしむ

引原の村は湖底の二百尺

出雲市 谷 口 あきら

ネクタイも 心も締めて 出勤す

鳴きもせず 身構える猫 大嫌らい

主旨だけを 誉めて自分は外にいる

鳥根県 槻 谷 一 葉

春めぐる古木は古木の花が咲き

ゆく春を惜しむか水の落ちる音

ぶつかった壁にもほしい信号機

吹田市 藤 原 世 死 春

狂乱の次きくるものにみな怯え

駅員の造った花壇がほほえまし

意見するつもりで呼べばまた借られ

柏原市 小 谷 葉 子

相合傘もれる対話も初夏の彩

小出しする愛 円周をかけている

ふたつ三つ欠けて妻の灯をとます

今治市 渡 辺 伊津志

真実を語る子供の腫におびえ

焼鳥がものの哀れを感じさせ

青森県 荒 田 つ る

満ち足りて誰よりさきに酔いつぶれ

良妻と言われてわれを無くす日々

濁る世へ今年も桜花をつけ 羽咋市 三 宅 ろ 亭

言わずだけ言わせ老練決をと

寝屋川市 井 上 武 松

熱川の湯煙りにワニねむたそう

もう一度恋してみたい修善寺

大阪市 横 地 正 彰

自販機が憎らし電車に置き去られ

公害をばらまくための高架でき

河内長野市 井 上 喜 醉

ストの駅鳩安心して遊び

銭のこと云うたが最後座がしらけ

須賀川市 平 栗 金 太 郎

落人の子孫それなり炭を焼く

労働歌唄って居ればアップされ

新見市 吉 田 落 猿

柏手も上手に鳴って今日たのし

どなたにも交わすあいさつ森の道

東大阪市 崎山美子

三日坊主又も鉢植買ってくる

上品な客で話題がみつからず

大阪市 秋田茂

いつも嘆いている 僕のキリスト

抜け道を通りたくない通りたい

大阪市 小谷清女

思ひ出は楽しい事だけたぐり寄せ

シャンとして出かけ帰って寝るも年

堺市 栗本藤持

老眼鏡値上げのデータよく見える

六文も上げねばならぬこの時勢

寝屋川市 江口度

綱渡りしようか石橋渡ろうか

ひよしぬけ定員割れの志願校

橿原市 西本保夫

人事異動他人はみんな出世する

平社員のボクに住友どこが良い

寝屋川市 福富隆子

愚にもつかぬ話でやっとなを晴らし

医療無料この券使わぬ日がつき

大阪市 大國たかし

留年に心落つく子ともなり

姑となる日も近い味加減

和歌山市 津田与史

春斗は幹部の面子で強くなり

おじいちゃん甘いと云われ今日も無事

岡山市 岡英好

漬物を教わる妻の素直です

親鳥のように夜食を運ぶ妻

堺市 堀畑奴風

有情無情どこかで誰かが君を待つ

面白う狂うてみんか春四月

和歌山市 沢山福水

大阪に惚れて路傍に腰を据え

生きながら地獄に落ちた吹きだまり

岸和田市 渡辺雅美

受験生ライバル同士並ぶ椅子

休日朝だけ母に起こされる

米子市 江原良二

五十年よくも此処まで手をつなぎ

それからは馬耳東風の術を知り

今治市 大本バット

気に入らぬ見合い無口と思われる

遺影との対話が母の日課なり

今治市 伊藤 一郎

昭和っ子にもカッコイイ小野田さん

小野田さん日本の心持ち帰り

今治市 今井 松花

春の宵お月さままで酔うた色

思惑があつて野良犬まっしぐら

鳥取市 大塚 豊生

乗せられる話と知らず酔うて去に

裏山の桜も添える三回忌

新潟県 栗和田 清子

旧交を温め過ぎて床に臥し

断わつたり断わられたりまた見合い

新潟県 市川 一峯

楽しみはテレビと炬燵老の冬

スターの座小野田に横井開け渡し

和歌山市 内芝 としよ

病床で空の碧さがじれつたく

離れ行く栄転素直に喜べず

尼崎市 大垣 たもつ

師の影を踏まぬ老後をいたわられ

利に聴い大阪弁が嫌らわれて

豊橋市 鎮浪 翠月

お見舞の言葉に困る程やつれ

近所では私は良妻賢母とか

東京都 朝倉 義子

毎日をボケて暮せる果報者

八十才越えて夫の駄々をきく

豊中市 安藤 寿美子

インフレへ組白く乾いとり

弱みそを売り物にして古稀迎え

島根県 谷岡 芳枝

あれしきを苦にして友が歩を乱し

ためされる私の歩道をひた走り

島根県 宍戸 千草

田園の野火赤赤と燃えて春

陽に向いてたくましく咲く木蓮花

松江市 岡崎 雪美

知恵おくれ無邪気な顔を頬に寄せ

我慢したつもりが人に悟される

赤穂市 池本 佐一

晴々と長寿の旅が雨にぬれ

湯原湯に心も浮いて長寿会

大阪市 内藤 ますえ

迷い子を抱いている方がなお困り

気がねして儲け大びらにして儲け

大阪市 須浦 つね

四十才親から見れば頼りなく
お中日逢いに来ました五条坂

高槻市 山田 スミ子

孤児の目に鳩の親子がする対話

細々と暮すプランを立て直し

新潟県 高野 不二

売り込みの為の反対してみせる

島根県 岩田 三和

せせらぎの流れにまかす石でいる

米子市 佐伯 越子

鶯の声互え渡る過疎の村

高知市 竹崎 寛

負けそうでも可愛そうだときるテレビ

松江市 梅本 登美也

移植ごて底のもぐらをおどろかし

銀の雨筍飯が売り切れて

倉敷市 高山 みどり

いつくしみ合う言葉にも似る春の夜

竹原市 大島 紫光

目録に耕耘機一台太く書く

青森県 田沢 務

赤軍派なみにおどされ吾子育て

出雲市 藤井 晴月

春の雨冬の名残りを惜しむかに

大阪市 花田 繁子

異状気象ゼネストには勝てず

大阪市 村島 秀村

折角の吉野の山も花曇り

初日きらきら彩どり淡き島の樹々

枯葦動き河童きよろりと顔を出す

妻言わず夫語らず朝の膳

人口爆発マルサス曰くそれごらん

良心を通せば合わぬ帳簿尻

真珠ほろほろ夜の車窓の別れ雨

逆鱗にふれられ青き修羅となる

ビル競うバベルの塔の愚を忘れ

植えられて煙草幼なき葉をひらく

仔を探す猫には猫の親ごころ

バベルの塔

長崎県

光 武 弦 太 朗

(壱岐)

同人吟

秀句鑑賞

—前月号から—

正本水客

利にさとい女となつて種紺の足袋

岩田美代

足袋の紺色から或る種の女性の年輪が眼に
浮かんで来てうまい。

米の減る早さを憐せだと思ふ

小浜 牧人

健康で明るい家庭の雰囲気は素直に感じら
れて、街いの無さに好感が持てる。

次々と死んで友だち若くなる

山川 阿茶

同年輩か、それ以上の昔からの友達が次第
に亡くなって交友関係の平均年齢がだんだん
低くなって来て淋しいというのである。長生
すれば何とかと云うような事に夢なり度くな
いものである。

独り暮しの外灯とは見えず

黒川 紫香

子供達は仕事で別居している、妻は何年か

前に死別して今は広々とした家に独り暮し
である。冷え冷えとした家の中にくらべて、外
灯だけは昔のままに妙に明るい。

野火のおどるは芽吹く大地の喊声か

三宅 不朽

野火おどるに、初春のエネルギーが感じら
れて力強い。

白樺心ゆるして雷にとけ

高橋 夕花

白い樺の精と降り積む雪の精は手を取りあ
つて一つになる。春よ早く来い、雪よいつま
でも溶けるなど無言の歌をうたう。

鍋底の丸味いいようもなく綺麗い

戸田 古方

鍋の底の円さに、安らぎに似た美しさの見
出せる人は仕合せな詩人である。

一億の一粒となる背広着る

高杉 鬼遊

小野田さんの句は、この欄だけで10句ほど
あったが此の句を代表として戴いた。一粒と
なる背広に、凡てを云い尽して美事である。

造花ではないんですと触れてみる

金井 文秋

造花という目新しくない題材を裏返しにし
てみせて、人物の表情も美事に浮彫りされて
いる。

米を磨ぐみんな揃った音たてて

堀江 芳子

嫁入った娘も大学へ行つてる息子も帰つて
きて久振りに一家が揃った、米を磨ぐ音にも
嬉しさがあふれる。

灯を消して母娘で亡父をまだ語り

両川 洋々

ひっそりと寄り添うて語り明かす母と娘、
まだの二字が時間の経過を適確に掴んでる。

地鎮祭地震があつて中止する

林野 甦光

何となく笑えないユーモアがある。

躍り出る春よハッサクを刺くしぶき

都倉 求芽

厚いハッサクの皮に爪を立てた時のしぶき
のほとばしりを、春の躍り出る姿と見る句主
の心は嬉しい。

朝市でまだ憶病なエビのひげ

関 美子

まだ風の冷たい朝市に、エビのひげはピク
ピク動いている。憶病なは面白い。

母と娘の会話入り込む隙がない

川崎 秋女

男とは所詮さみしく孤独なものでしか無い
のであろうか。

▼植田英詩氏（呉市）から「林野甦光氏
は病院の都合で左記へ（経過は良好です）
—千七三三広島市吉島東三丁目二・吉島
病院第一病棟二五—林野甦光。

川柳 中山道六十九次 (16) 富士野鞍馬

終点 三条大橋

大津から三里(一一・八キロ)

京都の里程元点は三条大橋の中央である。

この橋は加茂川に架けられてあり、天正十八年(一五九〇)豊臣秀吉が架設したもので、橋脚六十三本が全部石である。

寛政三奇人の一、憂国尊王の士、高山彦九郎正之の日記に

「一月三十日丑の刻斗に大津を立ち、白川橋にて手水し礼服す。三条大橋に至りて、恐れミ敬ミ謹ミて、宝祚長久を頓首拝し奉りて、二条仮橋を渡り、二条通を経て、堺町二条上ル所なる大村彦太郎へ入る」とある。その高山彦九郎が土下座して皇居を拝している銅像が、今東詰にある。

彦九郎座ったあたり牛の糞

当首

大村彦太郎は、有名な江戸白木屋の主人である。

橋上から東山が見え、

京へ這入ると直き見へる大文字

藤丸(二一四一〇)

大文字の山も小筆で旅日記

飛鳥(七六一九)

大文字山は、東山三十六峯の北端如意嶽で、盆の十六日に大文字の送り火を山上で焚く。その火床七十五の穴が普段でも見えるのである。

三條河原は、文祿三年(一五九四)強賊石川五右衛門が釜煎の処刑になった所で、

五右衛門は金のかかったころしやう

(七〇二五)

五右衛門はなまにへの時一首よみ

(二一六)

一石川や浜の真砂はつきるとも

世にぬすびとの種はつきまじ

その南の四條河原は夕涼みの名所で唄にもうたわれている。

洛中の汗が川原へまかり出

(拾四一五)

歌かるた四條河原の涼台

一卜寝入りしても四條のわらひ声

海鼠(二四六三四)

お定め通りの通りを涼む京の町

(二一一九)

三条大橋東詰を南へ四町「京都順覧記」に四條芝居、永祿年中、名古屋三左衛門出雲のおくにといへるものと歌舞妓を始む。初めは北野杜、祇園南林、又五條河原橋の南にて興行しけるに、秀吉公の命によって是処にうつす。とあり、今「歌舞伎発祥之地」の碑が建っている。江戸時代には四條大橋東詰に向い合って、南座と北座が在った。今南座だけが残存している。

京の絵図女房芝居はどこだ也

雙雅(玉12)

京の絵図芝居はどこだどこだなり

(安九菴3)

その東が祇園町で有名な遊里である。

つい顔のかはる四條の貸座敷

(武十六12)

前垂と湯具源平の祇園町

巨眼(二〇23)

一赤前垂白湯文字

通天の紅葉かえりは祇園町

梅鳥(九〇17)

豆銀を豆腐に崩すぎおん町

三枝(五三3)

一祇園豆腐

盃に夜の祇園を墨蒔絵

(武十二19)

西詰を南へ下ると先斗町で、祇園町に次ぐ

遊里で、

江戸っ子が深みへはまるぼんと町

升九(九三17)

後夜を打頭まで客のぼんと町

風松(二〇八12)

連れにかぐれて待っているぼんと町

メ丸(二二19)

間の抜けたやつが居そうなぼんと町

マコト(二三七3)

あほらしい夜の明るまでぼんと町

巨眼(二四三29)

先斗町鉄砲見世は知ったふり

鼠六(二五13)

京都の町は碁盤目といわれ、町名にも一条から九条まで、また風雅な名がつけられて、南へ行くのを下る、北へ行くのを上るとい

大の字で碁ばんを蟻の這ふも見え

カテウ(四二2)

天然さ王城の地は将棋盤

一秀(五三17)

七条と五条の間が珠数屋町

市東(五四44)

一東に一帖たらぬ京の町

マイタ(五三9)

九重は小路小路をあやにしき

市東(三五11)

京の町たひらな所で上り下り

市東(三八23)

三条通は国道であって、西は丹波に通じる。「大橋」というのは、すぐ西に高瀬川があり、その橋を「小橋」といい、加茂川の橋を大橋というのである。京都には名所、旧跡、神社、仏閣が非常に多い。

横町に山一つ宛京の町

光頂(八六31)

見所に指折なくす京の春

(武十八20)

つつまれるものなら水も京土産

板常(七七12)

一完

跋

中山道は、その発音の通り中仙道とも書く。しかし本文には中山道を用いた。東海道五十三次よりも一般には興味が薄く、柳句も少ないので、中山道六十九次に関する古川柳は、これを探し出すのに骨が折れたが、まあとにかく六十九次五二六kmを三年がかりで書き終った。

▼兵庫県民川柳大会は九月二十三日、生田神社会館で開催。雑詠一人一句、締切は七月末日。(応募資格兵庫県内在住、在勤者)詳細は次号。

次号 百人一首と川柳 富士野鞍馬

富士野鞍馬先生の「川柳・中山道六十九次」は本号をもって完結しました。さて、いよいよ次号から「百人一首と川柳」が登場いたします。八十歳の先生は「これが終るまで病気一つできない」という決意のほどをこの一作に示されておりませう。(不)

同人『川柳塔』句集

完成近し

編集スタッフ

不二田一三夫

同人諸氏へ句集のご報告を前月号に書くべきだったが、かんじんの原稿が締切日まで集まらず、イライラするだけでどうしようもなかった。原稿でヒステリックになるのは編集担当者の宿命だから、あんまり真剣にならないことにしているが、こんどの句集だけはそうはいかなかった。

二百五十氏参加が目標だった。それが締切日までには到着したのは百二、三十氏なのだ。これでは原稿の書きようがなかったのである。

二百五十名はぼくの責任のようなカタチになっていった。郵送費節約のため印刷物を本誌に三回もはさみこむなど打つべき手は打ったつもりだが、発行が七月なので「まだまだ、日がある」という安心さがみなさんにあった

ようである。

句集発表を五十音順にしたため、原稿がそろってくれないとまずレイアウトができない。だがこういうこともあろうかと、あらかじめ三回目にはさみこんだ、最後のお願ひにきました”式の印刷物も用意したことであった。

四月二十日ごろに印刷所へ原稿を入れることになっていったが、そのころやっつと二百二十余氏だった。もうひと息と、多い日には六十通もハガキや封書を書き送った。

そんなわけで四月号や五月号を句集準備の合いまにこしらえ相当の重労働だった。印刷所からは、早く原稿を入れてくれないと七月に発行できなくても責任はもてないと驚かさ

黄銅六角ボールトナツト
及び特殊換物全般

合資会社 西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL 06 三四五二一四
夜間 06 四四〇八

れ、とにかくギリギリまでネバったおかげで256氏になった。(あとからいただいた分は追加作品として入れた。)

川雑時代の「四百号記念」号のときも、これに近い苦しみを味わったが、こんどの句集の場合は時間的より精神的に参りかけたものである。かてて足を痛めたことも活動力を半減したし、おそらく第二次句集を出すころにはぼくもボケているだろうし、なんとかこの句集をそういう意味でもいいものにしたたいとおもった。だが金をいくら使ってもいい、というのではなく、時節柄赤字にならぬいでで仕上げることもぼくに課せられた宿題の一つでもあるのである。

目次の「作家別索引」に作家の住所を入れた。案内これに時間を使った。あまりおもしろい仕事ではないので、スタッフ諸氏にお手伝いねがうのは遠慮した。

ご病気とか、お仕事の都合で、どうにも句を提出できない方には、薫風さんにも手伝っていただき、こちらで句を集めた。本誌創刊号から最近号まで調べると、半日以上はかかったものである。ぼく自身の句なら一時間とかからなかったが、他人様のこととなると、その職業や年齢、また句風などを考慮に入れるので時間が相当にかかったのである。

三十句以上送句してきた人が百氏を越したが、毎日数通よりこないで、八尾の栞氏や豊中の薫風氏にいちいち来ていただくわけにもいかず、ほとんどぼくがえらばせてもらうことになった。そのかわりいただいた十八句をお知らせして、入れ替えなど遠慮なくお申しつけくださいと書き添えたことは、皆さんによるこんでもらえたようだった。なかには百句以上の方も何氏かあった。

「川柳雑誌」時代から本誌まで、毎月二回は校正で句を読んでいるので、ほとんどの作家のことは承知しているはずだから、この仕事はあまり苦にはならなかった。ある人の

は、ドラマ風に、またはムード一本に、それぞれの作家の個性に重点をおき、句の配列にまで気を配ったのもあった。しかし、雑誌の校正などで、どうにも時間のない時は、十八句のお知らせもできずじまいになった方もあった。この方々には誌上でおわび申しあげます。

それからおわびついでに、女流作家の「まな板のくぼみ」という句は、ぼくの関係した分は全部は必ずさせてもらった。これは「サラリーマンとコップ酒」同様、類句が多いからである。それともう一つ、下五の「秋の風」または「秋佗びし」といったのもほとんど敬遠した。理由は、上五、中七がきまって「死」であるからである。故白柳さんは、句会でも下五の「秋×××」はあまり抜かなかった。下五の用語の使い方「あーそうですか」となる場合が多いので、ぼくはよく名詞止めで逃げたが、路郎先生から「標語のくせがまだとれないか」とたびたび注意されたものである。下五が句の生命であることはいまさら云うまでもないが、なるべくなら川柳の常と語は避けるべきだと思う。

話の内容がとびとびになって恐縮だが、昭和三十三年に刊行した川柳雑誌の「私達」

は、当時門下二百二十余名で、参加作家は百三十六名だった。物故作家九名を加えて百四十五氏である。

句集「川柳塔」は同人三百四十余名で参加作家二百五十六氏だから、路郎先生も雲の峰から「よくやった」とほめてくださるのではないか——。これを機会に句に磨きをかけるよう努力することである、と自分に云いきかせたことである。

生々庵刊行委員長、栞編集スタッフ代表監修のもとに、校正は薫風、史好両氏にぼくが一回ずつ都合三回見ることになるので、万に一つの誤植はないとおもうが、原稿の読みにくい文字は、いちいち句者におたずねして万全を期したつもりである。

(地方の同人諸氏には七月中旬までにお手元へ届くようにいたします。)

川柳塔社十周年記念

同人 『川柳塔』

七月七日発行

一般ご購入の方には 価 千五百円
送 百四十円

句集刊行委員会

鬼子の弁

大路美幸

川柳塔五月号(五五六四)の七面山氏の「残念ながら」を読み、ペンをとりたくになりました。確かに、おっしゃる通りで「川柳塔のいずこにも(路郎先生の遺風)を偲ぶことが出来ない。」かも知れません。路郎師は、私自身祖父のような存在で、父や兄の話からその存命の御様子を知るだけではありませんが、一寸カンシャク持ちで、一寸天才で、一寸自惚れ屋で、一寸ワンマンであつたように想像されます。そのような人が亡くなれば、政治でも、家系でも同じでありますが一種類の解放感と、反撥感で次の世代は一寸頼りなくなるものです。そして先代を知るものは、「先代は——。先代は——。」を連発し、二世、三世はその言葉を嫌に思い、又ある時は励ましに思つて、只何となく一生を終つてしまふものです。

今川柳塔には、そのような空気が流れていくことはたしかです。否、川柳塔だけでなく、川柳界全体にも六巨頭亡き後、一寸頼りない柳社ばかりになつてしまつたようです。

だからと言って、七面山氏のおっしゃる通りに、「作家達が、日々『生氣』を失ひ、未来に何んの『希望』も『目標』も持たず、川柳することに『生き甲斐』も感ずることなく、無為な川柳生活を送つてゐる。」とは、私は思いません。むしろ路郎師存命より、川柳塔には自由な新しい息吹きが感じられ、句風に於ても、他の柳社との交流に於ても、希望と生き甲斐に満ち溢れているようにさえ思われます。もっと極端な言い方をすれば、旧作家(路郎師と師弟関係にあつた人)ほど希望も、目標もお持ちでないように感じます。

ここまで書くとは、何処からか「師をボードクするな。」とお声が聞えて来ました。私は決して「師をボードク」するつもりはありません。それどころか、七面山氏のおっしゃる通りに、「路郎師に勝るとも劣らぬ、後敵」にして、「鋭利」な指導者を求めて止みません。しかし、そんな「指導者」が若し出現すると、随分と窮屈だらうな、とも思います。教育勅語で育ち、戦陣訓で生きてきた

人達には、「指導者」のいない世界なんて考えられないでしょうが、元々人間があつて、社会があり、国家があるので。個人があつて、団体があるので。特に、川柳の世界では、その発生要因から考えても、個人が自由こそ一番大切なことではないでしょうか。定金冬二氏は、ふあうすと四月号で「五百羅漢は、五百の貌」なる一文を掲載して居られます。川柳の世界には、高いところから、ものを言う人があつてはならないと思います。

路郎師は、人生は悲しからずや右派と左派

が、世界観であり、
寝転べば壘一帖ふさぐのみ

が、人生観だと述べて居られます。そこには、自由平等の精神が横溢しています。決して川柳雑誌時代の「指導」そのものが、師の本心ではなかつたように思います。ほんとうの心は、「若き路郎師が、「土団子」の「小さな旗上」に述べて居られるように、「我等現代の川柳家は、このような努力(未完成の芸術を完成した芸術にしようとする努力)と、煩悶の矢面に立つて戦わねばならない。」という川柳修羅道への決意と「人間陶治の詩」なる人格の高揚にその力点があつたのではないのでしょうか。即ち、自由平等に立脚した戦う個人のつながり、それが柳社の心であり、個人個人の人間性回復への努力の心であると考えて居られたように思います。

我々川柳塔同人は、作句にも選句にも、七面山氏のおっしゃる通りに、「路郎師に比し

て、誠に御勉強不足であり、御力量不足である」と思っています。一人一人が、もつと川柳作家としての自覚を持ち、努力することが、川柳塔の句風を確立することにつながり、師の遺志を守ることになると存じます。

俺に似よ俺に似るなと子进行 路郎

きのう・きょう

本多柳志

◇戦陣訓と共にルバング島の密林に立て籠って、抗戦をつづけて来た小野田さんが三十年振りで桜咲く故国日本へ還えられた。紀三井寺のさくらに近い海南小野田の里の両親の待つ生家のたたみで、紀州銘菓と宇治茶を喫する姿をテレビで見て、何ということはなくジーンと来るものがあった。

密林の戦陣訓は生きつづけ

柳志

街も道も良くなりビルが建ち並んでいるが、昔の面影がなくなり、美しかった海も汚れているのは大変淋しいが、国が繁栄してるんですからまあ五分五分じゃないですか。とは帰宅直後の記者会見での小野田さんの述べである。

栄える国の君に報いるものありや 藻介
生きるだけ生きしルバングの緑かな 續

三十年の間に和歌山も変わった。日本も変わった。生ある限り抗戦をつづけよと命令を下した大元帥は既に神の座を下りた。三十年の青春の代償は余りにも大きかった。故郷に帰った喜びの次には大きな失望が来るのではなからうか。

命令主は人間になっていた

新之助

◇私共がたまたま思い出の地を訪ねて、昔のままの木々が在りし日の場所に、高々とそびえていたのはなつかしい。気味の悪い程繁っていた杉林が消えている、冷い清水が湧き出ていた岩かげの泉が、ハゲ山のすそに枯れ果ててしまっているのは淋しい限りである。

日本人は自然を愛する国民である。自然には緑の色がある。里にも山にも緑のあるところには美しさと共に人々の心に安らぎを与える。「兎孫のために美田を買わず」は西郷さ

一分間の柳論

路郎師が亡くなられてから、故白柳師の勧めで川柳を始めた、いわば川柳の初心者に等しい私に「一分間の柳論」が廻って来ました。そんな私でも今住んでいる東大阪市に川柳の会がないのを淋しく思い「川柳東大阪」を拵えてから約三年経った今では、川柳が私の生き甲斐の一つになりました。

近頃訳のわからない、思わせぶりな言葉で連ねただけの前衛的な句は私は好きません。やはり平易な本格川柳の方が好きです。

んの詩句だが、吾々は子孫のために美林を残してやりたい。和歌山の緑は三十年振りの小野田さんの目にどう映ったであろうか。

子孫のために美林を残すには社会共同の大きな力が必要。秋草に花を咲かすには春に種をまく必要がある。大木を育てるには三十年五十年の歳月が必要。子孫のために美田を買った力はなくとも幸吾々には川柳がある。子孫のための心の糧になる川柳がある。川柳塔ではこの度同人句集を刊行された。一人でも多くの作品を集録して、内容の充実した句集を残したいものである。

小野田さん帰還紀州の地図開く

十郎

軍国の母と現し世にたまえ

久美子

ふるさとに心に還るよもき餅

静歩

少尉待つ故郷の桜も満を持し

酔々

挿入の作品は電波新聞の募集句にて、二三の方には無断にて使用した非礼お許しを乞う。

竹中肖二

人間はいくらしゃちこばったとて、たかが地球上の一生物にしか過ぎません。サラット人生を詠んだ「命のある句」が好きです。

寝ころべば壘一帖ふさぐのみ

路郎

足あとを残そう砂のある限り

恵二郎

「六十を過ぎてから川柳を始めた人の句には進歩がない」と大先輩の誰かが云って居られたが、全くその通りで、恥かしながら私には次のような句しか詠めません。

恋猫の業はこんなやつれ果て

肖二

湯郷吟行に溶けこんで

野村太茂津



(白岩文衛氏と西尾繁氏・カメラ岳人)

「みまさか」での句会には、兼題の「剣」の選を命じられた。

些か剣道の心得を持っているので、喜び勇んで沢山の佳句と真剣勝負をした。

翌日は我が敬愛する剣豪宮本武蔵の生地を見学したが、作句する以前に見学して居れば又違った「剣」の句が生れたのではないかと残念に思った。とに角、広義に解釈して、剣をぞ存じない方も抜いたつもりである。そこで御登場願ったのは、沢庵和尚である。

「剣禅一致の秘訣」を説いた「不動智神妙録」(細川家所蔵)の中に「千手観音の一心正しければ、千の手みな用に立つ、兵衛の心正しければ、一心の働き自在にして数千の敵をも一剣に随うるが如し」とある。つまり「心正しからざれば剣も又正しからず」ということか。

剣道の稽古(敢て練習とは云わない)や試合をしていると、面を美しく斬ってやろう、胴をきれいに抜いてやろうと思つてやろう、とき合は、勝つことが出来ない。たとえその試合で勝つても、後味が良くない、何時までも心に悔が残るもので、ほんとに勝つたとは思えない。これが「邪剣」である。

願みて我が川柳を思うとき、その選者に秀句として「天」に選ばれても、そこに「正しい心」(その心の正しいかどうかは外から見えるものではない。自分自身で正しいかどうかをよく反省するほかない)がなければ、句会場で満場の拍手をいただいても、何か空しく心に風が吹き抜けるような、後々までその句が悔まれるのは私だけだろうか。

沢庵和尚は「敵の身に心を置けば敵の剣に心をとられ、我が剣に心を置けば、我が太刀に心をとられるなり、身体はどこかに心を一箇所におけば、余の方は用は欠くるなり、どこにも心を置くな、どこにも置かねば、我が身いっばいに行きわたたり、全身体にひろりて、「天心」なるなり。」沢庵は禅の工夫によって、心のおきどころを、このように悟り、心を活かして使った。

剣道で相手と立ち向かうとき、先ず心を鎮め、その場で、今の座禅のように、我と我が呼吸を深く大きくして、一から十まで静かに数え、のぼせを下げ、心を全身体にゆったり行きわたらせ、勝つ負けを忘れて、無心に立つときは、勝負の結果が負れるものであ

かな、すがすがしい気持になれるものである。わが川柳も又同じで、「没句」になつても、すがすがしい「没句」である。

題を先きに書いてから、この小文の内容に迷ってペンが走らないまま一週間以上も過ぎた。岳人さんに、帰路吟行の車中で、なにか書けと云われて軽々しく引き受けてしまったことを悔みながら、時間を費してしまった。

菜の花・富柳会合同の吟行は欠かしたことがない。いつも、ふんわかとした雰囲気の中に溶けこんでゆく目に見えない魅力は、たま

らなく楽しい。その上に、うれしいことに

「剣」の選者として宮本村で雨の外を眺めながら、その女主人の説明を聞きながら思ったことである。

「湯郷吟行の記」としては、落第点とは思うが、ペンの走るままに、大へんながらくお待たせいたしました。みんなを乗せたマイクロボスは雨にけぶる宮本村をあとにした。

無心には邪剣の隙がよく映り 太茂津

★

一九七四年版 川柳年鑑から

本誌関係で句が発表されているのをならべてみると、まず「著名柳人自選句」に、中島生々庵主幹が、

バスポート迷い子札です老夫婦
ぎこちない握手でうるさ型封じ

町の名は知らず煙草屋を右に折れ
探しもの探し疲れて妻眠る

情報過多だん気乗りせぬ返事
浜野奇童氏（弓削川柳社会長）は、

その影の薄さ汚染のひと憎む
アニマルのあがきへ歴史渦を巻き

貧農に飼われて鶏にある自由
電灯を消して夫婦の語に戻り

玉砂利の音サクサクと神話呼ぶ
川竹松風氏（高知川柳社主幹）は、

お早うの声ニクがまた匂い
この道をいつか抱かれてくる墓場
妻の買うネクタイ俺をおじいし
努力より運と云われてムットくる
火葬場の無口そのままち帰り

人 生

丸諸氏によるもので、第二次選八二句のなかから、生々庵主幹選に、

台風が汚職の橋を容赦せず （室谷徹舟）
意地ひとつ岐路の女の灯ともなり

社 会 吉田精一、石原青竜、黒川笠
子諸氏による、第二次選に残ったのは七七句

で、マンションのここにも朝のない女
（川上大輪）

この中に大阪があるめしの味
（岩井本蔭樺）

出稼ぎがうちで酔ってる久し振り
（中島英子）

自然 阿達義雄、白石朝太郎、鎌形み
のる諸氏によるもので第二次選六〇句から、

逆流へ素直まどかな石の貌―これは嘉数千
代香さんではないかとおもう。

一分間の柳論

私が川柳を始めたのは十六才の時です。その頃は、なにがなんでも五七五になるように作句していたものです。とにかく五七五以外は川柳ではないという考え方をしていたのです。確か十八才の時だっと思えます、ある奥さんに「小島君は、川柳をやっているそうだけど、私の亡くなった主人も川柳をやっていたのですよ」ということで、いろいろ話し

一九七三年版川柳年鑑作品

伝統・その美と醜

あんたかてうちかて阿呆で仲直り
（河内天笑）

沢山の人が歩けば道になり
（天正千梢）

一線のない生と死の境
（柳栗鶴丸）

七十年横に歩むもまた楽し
（水谷竹荘）

皇后さも女 ハンドバッグ提げ
（不二田一二夫）

川柳の真実と現代性 時実新子

贊美歌をうたう女の別な音（本田八笑人）
水浴びの鳥を見ている人妻か（橋高薫風）
モナリザの笑いに私も笑うて見る
（生信笑子）

公害は有難いですが蚊帳要らんです
（野村太茂津）

美しく老いる約束して別れ
（岩田美代）

小島蘭 幸

ているうち、この中から貴方が一番好きなものを一枚あげるから持って帰りたいと言われ、十数枚の古い短冊の中から頂いたのが、酒とろりとろり大空の心かも
路 郎
でした。この句、どう詠んでも五七五ではないのです、でも破調という感じが全然しませんでした。以後私は、なにがなんでも五七五という考え方をしなくなりました。

水煙抄

秀句鑑賞

—前月号から—

浜田久米雄

十二打つ時計の正確さに飽きる

谷川 渥子

十二時には十二の音を出すのは時計という器械である。そんな具合に時計は仕組みでいるのであるが、これに飽きるの感情は人間の心である。十二の最後まで聞いている人と正確な器械との対照がおもしろい。

寿の字どう崩してみてもめてたい字

渡辺 伊津志

寿の字がめでたい字に見え出すのはやはりひと年取った年令の人であろうと思われる。中学、高校時代に習い覚えた寿の字はそうした感触は薄いようだ。

口笛を吹くせめてもの反抗か

長尾 保

気分がよい時に出るのも口笛であるが、なにか心に反発した気持を持つときこれに対抗する気持がつい口笛に出る場合もある。不満

を口笛によって外へ出す気はわかると思う。

一円貨行きも帰りも踏んでゆき

川上 富子

昔の一円が今の何千円になっているかわからないがと角雲泥の相違とはこのことであろう。行きも帰りもは一円貨が落ちていゝのを十分承知しているのだがこれを拾う気がないのだ。昭和二年日給九十五銭で国鉄宝塚駅に就職した昔の私がつかしい。

挨拶を本で覚えたのにつまり

岸本 豊平次

余程場を踏まないと人前で話をする仕事はむずかしい。何回もくり返し練習したつもりなのに次の言葉が浮かんで来ないのは上つていゝ証拠である。

合格はやさしい顔の子に戻し

槻谷 一葉

受験勉強中の子の顔はまるで神様が乗り移っているように真剣そのものであったが合格の知らせを受けた顔は笑顔とやすらぎに変わった。親の顔はそれ以上ほころぶに違いない。

雨に帰るおやじの影がうすくなり

秋田 茂

晴天の日とはともかくとして雨の中を帰ってくる父の足取りにいつとはなく淋しさを感じられる。もち論年のせいであり、これに気が付く子供達の心にもやるせない淋しさが押し

寄せるのである。

よく読んで飲んだが薬効きもせず

野呂 右近

服用の際には注意書をよく読んでお使い下さいと書いてあるからには時間や数のこと読み返して飲んで見たものの、どうも適応症に効き目がない。病氣への心配といらだちが伺われる。

タクシーが来ましたよと追い出され

山田 スミ子

駄弁がつつき長尻の客にタクシーを呼んで上げた。この一言が待たなしの立ち上りとならざるを得ない。近代的長尻客撃退法のひとつの妙案である。

何をする人ぞ昼のバチンコ屋

須浦 つね

バチンコでめしを食っている人もあるとは聞いている。昼の日中にならぬと並んでチンジャラに余念がない。これではよいのであろうか。この人達はいかなる仕事を持っているのであろうか。首をかしげざるを得ない。

—編集部から—「金婚シリーズ」その一として、福井野迷路ご夫妻を前号で紹介しましたが、(その二)に予定していた西出一栄ご夫妻は、一栄さんのご病気で(神経痛)延期となりました。一日も早いご全快を祈ります。

(不)

おもちゃ

山本立児選

おもちゃ箱弟はいつも泣かされる 菩句
 玩具屋に軍国日本の音がする 魚山
 探してたおもちゃ見つかる雪が解け 眺明
 子はおもちゃ親は定価を見る売場 茶人
 眉ひいて夜のおもちゃになりに行く 宵明
 おもちゃみなこわし腕白息子なり 七面山
 プラモデル程度と大臣嘯きぬ どんたく
 順々とおもちゃに飽いて進む知恵 眺風
 一件落着迷わず孫におもちゃ買う 与史
 来客へおもちゃを皆出して見せ かつみ
 玩具売場鍵っ子閉店までねばり 寿美子
 お隣の買ったおもちゃを買ってやり 度
 隣の子うちのおもちゃでよく遊び 登美也
 課長さん変なおもちゃも入れて鍵 木魚
 パチンコの稼ぎでおもちゃ買って 翠月
 宿下駄は大人のおもちゃも覗いて来 洋々
 叱られる覚悟で孫と買うおもちゃ 思月
 満二才おもちゃ売場を知っており 無人
 悠々自適孫とおもちゃの日が続き 豊生

おもちゃ箱整頓されて気に入らず 重人
 モチモチと電話でねだらしている玩具 みのる
 子の夢がおもちゃの人形に語りかけ 越子
 子のおもちゃ親の気安める音がする 凡九郎
 特許権たかがオモチャとあなどれず 梁水
 よその子はこわれた玩具で遊ばされ 与根一
 背の子が素通りさせぬおもちゃ店 好一
 科学者にする気の様なおもちゃ買い 豊平次

佳

おもちゃ買って子の無い夫婦です 翁童
 将を射る魂胆ありと見たおもちゃ 本蔭棒
 輸出するおもちゃとだけ知る手内職 洋々
 縁日からラッパ鳴らして子が戻り 代仕男
 ゼンマイのぶんだけ猿の打つ太鼓 カズエ
 動くものみな動かして売るおもちゃ 利美
 足もいでのからの人形でよく遊び 弘生

人

おもちゃ売場隣の親も困っている 素身郎

地

迷子の手におもちゃ笑っている 三十四

天

仲直りする気おもちゃも貸している 保子

軸

オーケーはせぬライターおもちゃにし

(五月号発表分)

読売新聞から

(49・4・27)

川柳塔五六三号

品不足先ず空瓶に陽が当たる

高橋千万子

物不足泣く人こっそり笑う人

市川一峯

は世相を反映させたうまい句だ。

振る旗もなく職安の列にいる

川上大輪

は一つの真実をとらえ、

週刊誌毎週吊りビラだけで読み

北川春果

はなかなかおもしろい。

舟木与根一は「川柳は庶民の生活の中で親しまれ育ってきた唯一の庶民文学である。一握りの知識階級にしか判読出来ない表現や言葉であってはならない。大衆に愛される川柳であってほしい」と述べている。

(丘)

父の 日

島田雄峯選

父の日を照れるネクタイ派手に締め
父の日に自慢ののども聞く茶の間
父の日を社用で父は旅に居る
父の日の靴を磨いている感謝
父の日の父が茶の間の隅に居る
父の日にパパを光らせ遺児に論ず
父の日も父のくらしのvariなく
父の日に父に便りす梅雨の夜
父の日へ子等はプランを派手に立て
子に酌いでもらった父の日の銘酒
父の日にもらったネクタイ高くつき
父の日を祝った附が父に来る
父の日の感謝は無言の三本目
父の日へ気が付く妻と握手する
父の日に父に着せたい単衣縫う
父の日に届いてほしい便り書く
父の日に威張れる程の父でなし
父の日をせめて気儘な釣仕度
父の日だせめて叱言は止めにする
父の無い僕へ父の日また巡り

かつみ 喜風 章雅 英好 軒太楼 晴月 苦句 国彦 季贇 伊津志 利美 正彰 翁童 保夫 一風 カズエ 木魚 代仕男 英詩 洋々

父の日へ出番待ってる特級酒
父の日も父はやっぱり忙しく
父の日も父は達者で野良に居る
二人ともパパ父の日を笑い合う
父の日はふるりにあり墓洗う
父の日の遺影が若いままで笑み
母の日は贈られ父の日ねだられる
父の日に限らず併せそうな父
父の日の父常の顔鎌を研ぐ
父の日かそうかそうかと云うたきり
父の日へ内助の光る膳の色
父の日を覚えて居たは娘だけ
父の日は素直な父になっておき
父の日の父は残業して帰り
父の日に血管太き手にふれる
父の日に精密検査勧められ
贈られた酒父の日の味でのみ
脛かじりから父の日を祝われる
父の日の父丹念に髪を染め
父の日のネクタイ撰る娘目のやさし
父の日が子の日になったハイキング
もう一本付けてえな父の日やないか
父の日やから按摩してあげる
父の日だせめて一人にしておやり

白水 眺風 肖二 古方 藤持 右近 翠月 露杖 敏水 伶人 祥月 思月 雀踊子 無人 道子 バット 素身郎 綾女 竹馬 寿美子 どんたく 本陰棒

こ投句に

川柳塔柳箋

価 七〇円 送 七〇円

貿易

大鶴喜由選

円安でドルがどうやら持直し
低公寒日本のカーが海渡る
貿易に富んで資源に泣かされる
貿易で信を得た人捨てた人
貿易が盛ん世界は狭くなり
貿易はしても信仰変えられず
貿易が止まれば日本べっしやんこ
国益と私利と貿易交錯し
日本経済輸入資源が振り廻わし
輸出額伸びてヘドロで埋る海
何よりも片貿易を憎まれる
資源なき国貿易が生きる道
入超となって日本の円の危機
貿易へ関税というきたない手
飢饉でも廻わして呉れる国があり
出超入超国策と云う梓動く

軒太楼 章雅 英好 伊津志 道子 伶人 一風 季贇 翁童 保夫 一風 香珠夫 眺風 古方 凡九郎

貿易に黒字を出して小突かれる 貞祐
 貿易もアニマルとなりエゴが出る 藤持
 円価値は他国の資源に揺さぶられ 正彰
 怪情報貿易株は動き出し 翁童
 バイヤーの瞳が光る見本市 重人
 貿易が村の豆腐屋までひびき 木魚
 貿易がストリーキングまで輸入 古心
 接待にばかりつかれる貿易課 不二
 各国の粋をきそって貿易館 登美也
 貿易の船を見送る風に立つ 雀踊子
 貿易へドルと円とがからみ合い 千翁
 変動のスリルに生きる貿易商 たかし
 舶来に酔い国産の良さ忘る 喜風
 内職のこも外国向け釣り具 みのる
 貿易の不振に迷う手内職 祥月
 貿易が赤字になった日本丸 綾女

若鮎のように新入茶を配り 亭
 激流を乗り切る鮎の美しさ 越日
 手作りのうるかでもてなす鮎の里 春日
 笹焼きの鮎の風情を賞味する 肖二
 鮎料理箸を休めて見る鶉飼い 松花
 さわやかに鮎解禁の陽にはねる カズエ
 青春の鮎手裏剣のごと光り 白水
 鮎ほぐす手つきに仲居キャリア見せ どんたく
 鮎がのる皿もすましているようで 凡九郎
 初鮎が母の温味を抱いてくる 白水
 鮎提げて釣着のままで飲みに来る 竹馬
 鮎も鶉も必死鶉匠にあやつられ 悠泉
 会席の鮎へまだまだ手をつけず 保夫
 無理をして膳に乗った鮎が云う 千翁
 頭から丸食いにして美味い鮎 眺明
 友釣りの鮎だけでもって帰って来 思月
 ふるさと鮎の居るとこ釣れるとこ 祥月
 網の目を逃がれ若鮎春へ飛ぶ 軒太楼
 解禁の鮎を待ってる竿の艶 重人
 鮎走る河澄み切って雲写す 綾女
 清流の鮎の住居を汚すまい 福水
 写生する鮎を炭火が待っている 英詩

鮎

国弘半休門選

鮎一つ夕餉の話題さらってる 道子
 友がけの手ほどき受ける脚が冷え 伊津志
 鮎が住むそんな願いが淋しうて 可住
 大きさをほめて鮎の値にあきれ 千翁
 働いて食うには鮎の縁遠し 不二
 二次会の鮎はもったいなく残し 同
 庶民には縁ないものに鮎がいる 登美也
 泣きそうな顔で若鮎焼き上がり 翁童
 主婦として鮎一匹の値を恐れ 洋々
 鮎解禁までは有休使わない 思月

役人の腹は痛まぬ鮎料理 利美
 瀬の上は如何あろうとも上る鮎 右近
 貧しさの中のぜいたく鮎を焼く 苦句
 うつぶんを沈めたい日の鮎を釣る 千代香
 市場籠鮎の匂いも知らず朽ち 眺明

鮎の骨も旦那の骨も抜いてみせ 寿美子
 素人の種鮎ばかり疲れさせ 眺風
 夕陽落つあと一匹の鮎を追い 豊生

鮎は火に鶉の目鶉匠の眼に射られ 軸

七月七日の会場が変わりました (P21参照)

初歩教室

題「影」

本田恵二朗

人間は言葉という便利至極なものを持って
いるが、よほど沢山の言葉を知っている者で
も、自分の思うことを十分に表現すること
は中々むつかしいことである。十分に表現し
ようと思つて喋りまわると長たらしくなって、
相手を退屈させてしまう。そこで簡単に、よ
く通じる言葉で表現できたらと苦心してみ
るが、これも中々むつかしいことである。

簡単に言つてしまつと、味も温まもない、
つまり無味乾燥したものになつてしまつて、
相手に好感を提示し得ないばかりか、時には
誤解されることさえある。簡単な言葉だが味
があり温さがある表現をするにはどうすれば
よいのかと昔ながら考えてみたいものだ。

そこで私は思う。笑いとかユーモアとかジ
ョークなどを少々効かせるならば、味や温さ
が加えられるのではなからうか。日常の言葉
の表現に必要なことだと思つと同時に、川柳
という短文芸にも必要なことだと思つ。

母の面影を叔母が見せてくれ
(叔母達者亡母の面影見せてくれ)

手術のメスを見つめてる無影灯
(無影灯メスの動きを看視する)

光と影一方だけが目にうつる
(光と影その一方がところ引く)

面影が亡母に似ていた久しぶり
のしかかる影に心を奪われる

(のしかかる影が心を押しつぶす)
失意の日影すてたきと思つ日よ

(わが影を捨てたし傷心の歩が重い)
七十才はや恍惚の影よきる

(恍惚の影がよぎつた古稀の春)
初恋の人の面影としとらぬ

(初恋の面影はたちのままで浮く)
くたびれて帰る夕陽の影が伸び

(夕焼けへ今日の疲れの影長く)
泣き濡れて二人一つの影法師

(茜雲二人の影が泣き濡れる)
傷心に突つた肩を月の影

(月影が傷心の肩とがらせる)
雪洞へ二つの影がもつれてる

(ほんぼりへそつともつれる影二つ)
よりそつて句碑の影僕影の影

(そつと寄り添う僕の影と句碑の影)
たそがれ私の影を見失い

面影を抱き再婚に踏み切れず
(面影が再婚話よせつまず)

前科の影更生へつきまとい
(更生へ前科の影がつきまとい)

師の影など飛び越えて行け芸の道

誓二

同

凡九郎

無人

同

翁童

同

サヨ

頼次

紫宏

露杖

同

本蔭棒

宗義

同

慶彦

同

(師の影を踏み越せ芸の道きびし)
値上げの異影で大物笑つたり

(大物の影が値上げの異をかけ)
わが影におびえる過去をもつ男

城の影逆さにうつす水鏡
(城影を逆に写して水黙る)

影の深さが一層光を強調し
(影深く光を強く強くする)

ぶきらぼうなお人影までそそくさと
(ぶきらぼうその影までそそくさと)

せせらぎに影踊らせて草が萌え
(せせらぎに影踊らせて草萌える)

春愁の影を写しずかに蘭薫る
(春愁の影を写しずかに蘭薫る)

よくもまあついで来る影あわれとも
星影にくやし涙を見つけれられ

影膳の主が三十年目に坐り
肩おとす影まで亡父に似てかなし

影みたのにスマートな脚に似たかなし
三尊の灯影にゆらくおかんばせ

軟焦点の面影に逢う三周忌
影法師もつれて折れる街の角

鍵っ子の砂場へ影が伸びてくる
古里の小道影踏みした小道

泣きそふな私の影が前を行く
げんまんの子供が描く影法師

(げんまんの子らがなぬ影を描く)
かくれんぼ影が見えぬ陽が沈む

(かくれんぼ影が見えぬ夕焼け)
杖となり寄り添う影のうるわしく

(杖となり寄り添う影のうるわしく)

同

利美

同

奴風

度

伊津志

同

大成

同

竹馬

同

静泉

同

貞祐

同

カヅエ

同

白蝶がトラ猫にじゃれ草の影

(白蝶が猫の昼寝の影にじゃれ)

かたつむり恋の航路の影を消し

飛ぶ鳥も落した頃の影やなし

在りし日の面影偲び聞く弔詞

(面影を浮き影りにして弔詞泣く)

影の無い笑いにお見合吉と出る

(影の無い笑くばに惚れた見合の座)

距離をおく慈顔に師の影踏みそうで

(距離おけば影を踏みよと慈顔の師)

影薄くなっても頑固に変わりなし

(影薄くなればなるほど増す頑固)

母の歌胸に面影みわたる

(子守唄亡母の面影浮いてくる)

線香のけむりを受けてしのぶ影

(香煙の彼方に浮ぶ面影よ)

静観堂

同

良二

同

茂美

同

幸生

同

繁子

同

駒子

同

同

同

同

同

大阪訪問

馬場魚山

四月六・七日にかけてムコさんに同道を願って大阪へ行ってきました。

理由は二男が新しく世帯を持ったので気がかりになり出かけたものでした。天王寺区谷町のある会社に勤めて早や五年、生れ故郷を

美が一つ夫婦の影が寄り添うて

(老夫婦の寄り添う影の美しく)

車輪の音同じ始発に人影まばら

(人影もまばらに響く始発ベル)

影法師追い従いて来るのはお前だけ

(影よ影ついて来るのはお前だけ)

師の影を踏まずの言葉孫知らず

(師の影を踏んだり蹴ったり現代っ子)

逝った子の影が夢路を遠ざかる

月影を踏んで女の生きる道

なんとなく彼女に見えてくる影絵

ネオンの灯男の影を吸い寄せる

桃咲けど翁はあらず影もなく

月の夜をわが影ふみて帰えりけり

(十六夜のわが影長し帰り道)

わが影を踏み歩く上弦の月

ますえ

静子

生仏

藤持

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

ただ一人で発って羽ばたくまでになったと思ふと、わが子ながら「よくやった」とほめてやりたかったのです。

大阪駅まで二男夫婦が出迎えてくれ、マイホームは奈良県に近い柏原市とかで、ついでに法隆寺や橿原神宮へ連れてくれました。途中桜が満開で目を楽しませてくれました。

翌日は大阪城へ行きまへ出た、折悪しく途中から雨で、その足で帰りました。

も遅れた特急雷鳥で帰りました。

柏原市も花がきれいで印象がよかったです。すが「川柳塔」をひろげて見ると、わずかに葉子さんと同人では可動さんの二人だけに驚きました。

(わが影を踏めば上弦の月が笑む)

夏の道影をたどりて歩き行き

(木の影を踏み踏み夏の陽と遊ぶ)

わがものと思えばいとし影法師

旅先の記念撮影皆笑顔

(旅写真これも笑顔これも笑顔)

幻影のように悩みつきな片想い

(片想いはかない影を今日も追う)

寄り添うた影に夜桜ふりかかり

(寄り添うた影にほろほろ花吹雪)

秀村

濁水

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

題一 波一 六月二十日締切(八月号発表)

宛先 倉敷市下津井一十九一三四七二一

(六月一日より住居標示が左の通りと)

(なりましたからご記録願います)

本用恵二朗

そこで「ふあうすと」の年鑑句集を開けたのですが、吟社もなく投句者も見当らず、ようやく大阪に親せきが出来、柳縁にありつけるところでいたのにガッカリしました。

一人や二人の川柳家なら田舎の西経海にだっています。

「川柳塔」「番傘」その他吟社があり、川柳のメッカといわれる大阪に、こんな土地があるとは驚きました。

近くの東大阪には吟社もあり、柳人も多勢いられるのに不思議です。もっと川柳のPRが必要でしょう。川柳の育たぬ町となると、あまりモノわかりのよい人間はいないのかも知れません。

大 萬 川 柳

「馬 鹿」 入選発表

親しさの馬鹿が互に云える友

大阪 儀一

親馬鹿を計算ずくの子の無心

大阪 あいき

馬鹿にされまいと博学ちらつかせ

貝塚 つき子

あなた純情ねえ馬鹿のようにもと

藤井寺 吸江

馬鹿になる顔たしかめる舞台裏

笠岡 桃里

おつちよこちよいの桜もあつた馬

兵庫 可住

今日もまた馬鹿になる気の遠い道

倉敷 梁水

酔いしれて馬鹿になりたい失意の

和歌山 吉野

正直をいつでも馬鹿にする政治

和歌山 武雄

運命線馬鹿正直へ開かない

八尾 弥生

淋しさはバカと叱つてくれぬ人

富田林 弥栄子

選者 川村好郎

投句総数 六百五十句
入選 七十一句

いやーんばかり男たわいなし

宝塚 静馬

年輪がすんなり馬鹿にさせてくれ

堺 天笑

馬鹿だったと気付いた朝の苦いお

松江 晃男

自嘲する叫びこだまも馬鹿野郎

今治 宵明

大衆が馬鹿みてストが盛り上り

呉 魁光

先生から見れば親馬鹿揃うてる

大阪 一栄

馬鹿笑いたくもなるさ物価高

郡山 カズエ

銭に頭下げるつもり馬鹿となり

神戸 どんたく

馬鹿でいる妻で家中円く住み

鳥取 保子

惜しみなく愛する馬鹿になりきつ

倉敷 素身郎

スケールの大きさ馬鹿になつてい

倉敷 千翁

馬鹿なこと話してくつろぐ夜警の

大阪 清人

灯

大阪 繁子

馬鹿野郎男のうつぶん暗らすとき

松江 登美也

角さんを馬鹿呼ばわりの縄のれん

大阪 三十四

叱られて馬鹿馬鹿なりに腹を立て

高槻 潮花

馬鹿と云われ発奮する人怒る人

豊屋川 度

子の肚が読めないほどの馬鹿でな

倉敷 春日

い

もう一度親馬鹿になる腕を組み

尼崎 徹也

口癖の馬鹿と言うのも愛情か

大阪 智子

座禅組んでみても馬鹿にはなり切

馬鹿

れず

子

子の夢をこわす親馬鹿とは知らず

西宮 康博

不渡りへそんな馬鹿だと慌て出し

人間国宝馬鹿と呼ばれた過去を持

ち

円満におさめる座なり馬鹿を買

さつきまでの馬鹿終電で醒めかか

り

人並みに外れてるから馬鹿に見え

馬鹿だったなあと一生を振りかえ

豊屋川 小路

笠岡 古庵

屋台酒上司を馬鹿にしてしまい

岡山 止水

凡人でいるから馬鹿になりきれず

鳥取 紫宏

馬鹿野郎怒鳴つて父の目が笑

馬鹿になることも憶えて宮仕え

ばか騒ぎあとの虚しさかみしめる

コツコツと働く私が馬鹿に見え

大阪 緑水

馬鹿でよし正直者でいくつも

利巧にはなれず馬鹿にはなおな

ある時の私の馬鹿にうろたえる

馬鹿野郎胸につかえてる拳

富田林 花梢

馬鹿だねと母は味方になってくれ

山彦も泣いて戻した馬鹿野郎

鳥根 芳子

親馬鹿になる伴せも七五三

バカバカバカまんざらでない叩き

よう

はっきりと自分が馬鹿と知る落目

否定するにも馬鹿らしいスキャン

ダル

馬鹿みるが落ちと賛成してくれず

口ぐせの馬鹿老婆の耳にたこ

耳 崎利美

ホステスの目にも馬鹿だめ金使

馬鹿は百も承知返らぬ金を貸し

鳥取 洋々

馬鹿だなあ妻愛称の如く受け

富田林 弥栄子

馬鹿だなあ妻愛称の如く受け

鳥取 洋々

馬鹿だなあ妻愛称の如く受け

鳥取 洋々

ええ私馬鹿よと女惚れている
馬鹿でよし子へ山を売り金を借り

馬鹿になる心の中がせますぎる
佳句 大州 曉 明

毒舌を聞く方の耳馬鹿にする
八尾 弥生

有頂天のときは人みな馬鹿にみえ
藤井寺 吸江

馬鹿となる酒場の椅子は坐りよ
岡山 洋之

コチコチの世相へ許せ四月馬鹿
大阪 柳志

もう馬鹿の仮面はずして退職す
人ノ句

(前号訂正)「麻生霞乃先生を月ヶ瀬梅林に
囲む一有信新之助」の文中、P29中段23行目
は齋藤拙堂(寛政9)慶応1:7:15)

▼五月三日第七回東洋樹賞贈呈川柳大会が明
治生命ホールで開かれ、百六十六名出席の
盛況。受賞者下村梵氏が昭和二年生れの若さ
で、武玉川を自費出版していることに、出席
者ほとんどが驚嘆。川柳塔から選者橋高薫
風氏をはじめ遠来の河村日満、山内静水氏を
含めて十七名が出席、河村日満氏が総合八位
に入賞ラジオ関西よりの楯を獲得。出席一
乗・小松園・薫風・日満・奇童・鉄人・巷雨
・牧人・松笑人・静水・静歩・岳人・酔々・
鬼遊・新之助・雀踊子・鶴声。(新之助)

地ノ句	馬鹿になれ馬鹿になりませう或る日 の会話	天ノ句	エイプリルフルであれかし友の 訃よ	選者吟	子を捨てる女を馬鹿でかたづけ る	昭和四十九年度 ベストテン(四月現在)	花梢	十止庵	可住	吸江
堺	大阪 凡九郎	大阪	神戸 どんたく	九	一〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇
天笑	文秋	凡九郎	静泉	緑水	弥生	芳子	重人	古庵	小路	牧人
五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五
天笑	文秋	凡九郎	静泉	緑水	弥生	芳子	重人	古庵	小路	牧人
九、〇	八、五	八、〇	八、〇	八、〇	七、五	七、五	七、五	七、〇	七、〇	七、〇
堺	大阪	神戸	大阪	大阪	八尾	倉敷	島根	松原	笠岡	豊原川
二一	二二	二三	二四	二五	二六	二七	二八	二九	三〇	三一
千代香	静馬	曉明	「卵」	昭和四十九年度第七回	第八回	「あなた(君)」	投句先	干593	三の七	大萬川柳係
六、〇	五、五	五、五	五月以内	締切 六月二十日	締切 七月二十日	堺市堀上緑町一の	藤井一二三方	（編集部から一本号から、句の あとへ雅号を入れることになりま した）		

一分間の柳論

川柳とは何かと自分自身に問いつめ又人に
問いただしたい時がよくある。然しズバリ川
柳とはこれであると言ふ言葉も知らず又自身
へ答える自信もない。唯川柳は僕に取っては
人間陶冶の詩で有りたく且、毎日のセチ辛
生活の支えであり、明日に生きる闘いの活力
にしたいのである。

川柳は毎日の生活を通じて起る喜び、悲し
み、希望等を十七文字で表現し、訴える生活
詩であると同時に短歌、俳句と同様に文芸で
ある事にも変りがない。従って文芸である以
て

上、その十七文字に依る表現の仕方や、文
字、用語の扱い方に上手下手が有り、出来た
句に上手、下手の優劣がつくのも当然の事
あり、作句者は競って勝れた句、上手な巧
句と研究努力し工夫精進するものもこれ又然
と云える。命ある句、格調の高い句、上手な
句、勝れた巧い句と考えると大変難しく論議
も湧いて来る。

一分間の柳論では到低論じ切れない大きな
問題でもある。又の機会にゆっくりとのべさ
せていこう。

清水一保

柳界展望

(原稿締切毎月末)

が一匹しずむ男の秋一ほか九篇一定金冬二氏。佳作第一席に小田二十貫氏。同二席は中川一氏。「紋太賞」は「ガスライター」炎の中でおとなたち一ほか九篇の中で玉枝氏。佳作第一席は前田美巳代氏。同二席は小林比呂子氏。

亀有一一〇、田地三〇一、友会。送料共一五〇円。
▼川柳研究年度賞(昭和四十八年度)第一席「バック刺く女の面皮割がす野」に松村育子。第二席「野仏に祈る名もない人ばかり」佐藤岳俊。第三席「糞虫の糞を風呂に吹かれいる」伊藤律。諸氏。

市北区中之島一四)
▼岩本具里院氏(奈良県)から「野迷路先生の大フツ」です。(金婚シリーズ)このハガキの文面次号に。
▼川崎正孝氏(NHK教養部)から「あでやかな山川阿茶さん(お話)」が、お蔭でよりよい番組を作ることが出来ました。ありがとうございます。

このたび大阪市を、環境保健局医務監を最後に退職いたしました。その間交通局病院廃止の死水をとったり、桃山病院では珍らしい伝染病を診療したり、また転じては看護学院、助産婦学院の運営に当たったりして、医者としてかなり特異なコースを歩いたように思います。在職中は、終始かわらぬご懇情を賜りましたこと、厚く御礼申し上げます。

今後、幸い健康にも恵まれておりますので、敷かれたレールを走るのではなく、自分の敷いたレールを走ってみたく思っております。

どうぞなお一層ご高誼のほどをお願い申し上げます。

北川春葉

▼井上剣花坊句碑建立募金一發起人は下田市西本郷一〇一八川柳黒潮吟社主幹藤原時化緒外同人一同句碑は、松陰とお吉下田の裏表。敷地は下田市弁天祠内。寄付金は一口千円。(何口でも可)募金締切本年七月末日。句碑除幕式並記念句会は九月十一日午前十一時から下田市柿崎井上剣花坊句碑前で行われる。句会は同日午後一時から下田市信用金庫三階大会議場へ参加費千円(軽食並会報贈呈)題「松・鶴子選」陰・竹林選一劍・夢二郎選一吉・鼎三選一劍・尺蠖選一吉・花・青竜刀選一坊・恰村選一投句締切八月二十日(出句料三百円)(郵券可、早発表誌)下四一五静岡市下田市六二七一一五高橋雨耕

▼「春三賞」を川柳ジャーナル四月号で発表。春三賞は水俣因、弱肉のおぼえ魚の目まばたかぬ。ほか九篇一廣部可奈子氏。準賞に金子清抱・松本葦舟・細川静氏。

▼若本多久志氏(西宮市)は四月十八日、兵庫県知事を囲む文芸家のつどいに出席(川柳)発言時間が少なかったが川柳理解を深める一助にはなつたと一けいさつの友「川柳漫談」の快筆いよいよ湧える。

▼藤井明朗氏編集兼発行「むらくも」四月号は二五周年記念大会号。正本水客副理事長の句評などが光る。

▼福島鉄児氏(高槻市)から「浜野奇童さんの媒酌で片山巷雨さんの令息(高校教諭)が五月十二日に岡山

▼一九七三年度(第六回)周魚賞は第一席「貧しくも風は綺麗な金で呑み」五十嵐竹早子。第二席「何時何処で見たのか恐い他人の目」赤松喜美子。第三席は「今夜発つ母は明日の米も磨き」小谷源氏諸氏。

▼川柳宮城野の四十八年度最優秀作品は「国富んで山河つくれた貌となる」後藤孝氏。同人の部は該当者なしとなつている。

▼職員文芸誌「なにかわ」へ北川春葉本誌副主幹が「助産婦あれこれ」を、児島与呂志氏が「一分間の私考」を執筆。川柳欄には本社同人が活躍している。発行所大阪市職員局厚生課(大阪

さんと大阪南海福寿殿で五月十二日華燭の典を挙げられた。

北川春葉

▼「紋太賞」がきまつた。「ふあうすと賞」は「蝙蝠

▼「ふあうすと賞」は「蝙蝠

▼「ふあうすと賞」は「蝙蝠

▼「ふあうすと賞」は「蝙蝠

北川春葉

▼「ふあうすと賞」は「蝙蝠

▼「ふあうすと賞」は「蝙蝠

▼「ふあうすと賞」は「蝙蝠

▼「ふあうすと賞」は「蝙蝠

北川春葉

市のロイヤルホテルで挙式
—私も招待されています
▼浜田久米雄氏(岡山県)
から、宗義氏の句碑除幕の
写真拝受。

▼河村日満氏(鳥取市)か
ら一鳥取知事選は大敗、次
は六月の参議院選、十一月
の後継者の市会選挙とつづ
き、一柳人政治家はこのこ
ところ大忙しのご様子。

▼恒松町紅氏(松江市)は
四か月ぶりに退院された。
—全国郵政川柳人連盟「川
柳ポスト」誌中国ブロック
の第九回ブロック大会を宮
島口黛仙荘で開催、中国五
県から参加盛況。氏は松江
市のリーダーである。

▼阿万方的氏(泉佐野市)
の色紙展が五月一日〜三十
日まで神戸三宮大丸東側、三
東海銀行ロビーで開催「大
和路色紙展」

新同人紹介

堀 内 曉 風

—大八・二三夫—推薦

佐々木 静 泉

—生々庵・二三夫—推薦

▼藤井春日氏(倉敷市)か
ら—このほど竹内翁童氏の
丸文川柳会に招待され、楽し
い半日を過ごしました。翁童
氏は丸文川柳の文化部長と
してまた写真展と併合長と
開催。近くマイホーム新築
求めています。吉備路に
▼大矢十郎氏(新宮市)の
長男喜一氏(吹田市在住)
がこのほど「北大阪囲碁将
棋センター」開設。川柳塔
社同人に限り無料サービ
スという。また同店内に
掲示する囲碁、将棋の川柳
を募集している。宛先は吹
田市泉町五丁目十一〜十四
大矢喜一。(豊津駅から市
民病院の方向へ歩いて一、
二分)

▼前山北海氏(ハワイ)は
ハワイ・日本人間の最大代
表的団体である「ハワイ日
本人連合協会」の会長とし
て大活躍をされている。
▼八木摩太郎氏は四月十四
日禅修行団体常葉会で「堺
の昔話」を講話、好評。
▼尼緑之助氏(出雲市)島
根県文芸大会が七月二十一
日に変更され、七月七日は
出席可能になりました。
▼岡崎祥月氏(松江市)か
ら—も同文のよろこびを寄せ
られた。

▼吉岡通児氏(松江市)か
ら—この数か月店舗の改設
で繁忙をさわめました。四
月にオーブン、五月になれ
ばいくらか落ちつくでしよ
うと。脱サラのご健闘を祈
ります。

▼光好陽子さん(岡山市)
は三十七年間勤めた電報局
を定年退職。満州から引き
揚げて帰りに育てた夢中で
書きました。これからは川柳と書
道へ力をそそぎたいと思っ
ます。

▼山田季賢氏(高槻市)か
ら—手術をうけ退院の日を
楽しみにしています。

▼板尾岳人氏(富田林市)
の令息を長野から大阪の新
院へ、往後二十一時間を病
之助氏が車で連れて帰られ
た。友情というものはこう
いう時に光る。

▼弘津柳慶氏(山口県)か
ら—長男が山陰沖へ釣りに
行き崖から落ち骨折。益田
市の日赤へ入院しましたが
経過は良好で五月には退院
の予定とか。

▼植田英詩氏(呉市)から
—山内静水氏夫人は四月に
おめでとうございませす。
全快して退院されました。
▼小出智子さん(大阪市)
が川柳をすすめた高橋夕花
さんが、秀句鑑賞に、ま
秋田茂氏がとも二作目に
えらばれ、自分のことによ
うによるこんでおられる。

▼四月下旬から五月上旬へか
け令息と北海道観光。網走
では水芭蕉がとも神秘的
でした。

▼富柳会・菜の花合同の剣
豪の里、湯之郷温泉から寄
せ書拝受。近畿勢のほかは
三井酔夢、田中好啓、藤川
良子諸氏の雅号があたたか
い。

▼高知川柳社の春季川柳大
会から寄せ書拝受。

▼石垣花子さん(米子市)
の母堂が四月二日九十一歳
の高齢で逝去。謹悼。

▼不二田一三夫氏は五月十
一日、秋田実先生の夕食会
に招かれ(梅地下滝澤)寄
席演芸の長老「にわか」の
一輪亭花咲郎や漫才作家三
氏と楽しいひとときを過ご
された。その作家の一人、
居村哲也氏の尊父は「ふあ
うす」と川柳社—同人居村梅
窓氏である。—あるラジ
オ放送局用に本社同会の模
様を取材したいと申込まれ
たが局側との時間が合わず
次の機会にゆずることにな
った。

▼6月の句会

▼堺・若芽合同句会—十三
日午後六時から—題—方角
・滑・ついで—代表—会場
は八木摩太郎宅。

▼南大阪川柳会—二十日午
後六時から—題—校友・つ
ぶす・別人・育つ—会場は
松崎町三丁目大万。

▼南海川柳会—二十日午後
六時から—題—傍系・予言
・世間並み—会場は南海電
鉄本社食堂内。

▼川柳東大阪—二十二日午
後六時から—題—本音・さ
ぐる・無精・バランス—会
場は東大阪中央公民館2F
第二集会室(近鉄永和駅前
(南)市民会館内)

本社 五月旬会

会場 以和貴荘

七日 午後六時

ジャンボ連休のあと、このような盛会になろうとは——ありがたいございました。このなかに太茂津氏の和歌山勢が五氏。

柳話—小松園氏が四字に形成された熟語を百近く白紙に書いて、日ごろの蘊蓄のほどを示めされた。かつて路郎先生は「物識り小松園」といわれたことがある。それを裏書きするように、場内からの質問にも明快な答えを出し、まことに柳話にふさわしいテーマであった。

とくにタイムリーだったのは「油断大敵」だった。戦時、平時を問わず、油をさらすことは大敵である。その油、すなわち「ガソリン」問題がそれである。プロの政治家のあわてふためいたぶざまさへ川柳家の皮肉は辛らつをきわめた。

兼題「めし」の西いわを氏が観光地からの交通渋滞で帰阪が遅れ、若本多久志氏が代選された。

七題中四題までが女性軍の天位（花梢さんが二題）川柳のウーマン・リブは健在だ。

本月の月間賞杯は、月間賞杯男、城一舟氏

にかがやいた。(不) (河井庸佑整理)

(進行—西田柳宏子—記録・高杉鬼遊)

出席—与呂志・文秋・古方・百酒・柳志・たかし・三郎・眉水・多久志・太茂津・マサ子・秀信・政夫・富子・摩太郎・花梢・正彰・武雄・静馬・肖二・綾女・喜風・一三夫・鶴声・三十四・トメ子・幸生・維久子・悦郎・一舟・形水・登・好郎・十止庵・香珠夫・柳宏子・凡九郎・頂留子・緑水・天笑・好一・儀一・敏・重人・誓二・修史・吸江・葛城・つき子・喜美子・夕花・薫風・美幸・さかえ・清人・鎮彦・素郎・雀踊子・あいき・清女・弥生・酔々・岳人・小松園・恒明・牧人・庸佑・メ女・史好・鬼遊・栞・葉子。

席題「いんちき」 本多 清人選

いんちきの知らぬ職人たくましい 武雄
いんちきを幼い瞳がとまどわせ あいき
いんちきが二の足踏んだ涼しい目 重人
いんちきと知って座興へ乗つてやり 百酒
いんちきに使う頭はある男 凡九郎
いんちきの医者とは知らず過疎の土地 正彰
インチキの通る相手にされている 天笑
メイドインジャパンの舶来横行す 静馬
インチキを知らない奴も居て売れる 三十四
インチキと知っても欲しい薬です 幸生
かけ出しの露店いんちき見破られ 儀一
いんちきを見て見ぬふりも平社員 形水
いんちきの穴いんちきで埋められる 天笑
いんちきに感心してる四月馬鹿 悦郎
いんちきな写真を街で掴まされ 緑水

インチキ論題目にスプーン曲げつつけ

いんちきと知らずご近所まで誘い
いんちきの儲け寄付でもして悔ゆる
いんちきを抽選洩れとする 仕組み
マジックともなればいんちき罪がなし
いんちきを承知身なりに買う人情
いんちきを掴まばいんちき逃げたい
いんちきで儲け競馬で皆とられ
いんちきでバスレクラスのびりに居る
誇大広告にうまく釣られた造成地
いんちきも広告代には元をかけた
白昼のいんちきビルの影を選び
インチキも出来ず裏屋に楚々と住み
インチキを見てみぬふりの世を渡る
草の根で善男善女かもにする
あざやかな話術に又も引っかかり
いんちきと見せぬいんちきだから売れ
いんちきの公約期待に副いきれず
政治家の城いんちきを積み上げる
貧乏は承知いんちき許せない 維久子

席題「門 灯」 神谷凡九郎選

徹夜してついでに門灯消して寝る つき子
華やける門灯小意気な寡婦が住み 修史
門灯へ一番星が来て笑う 岳人
もて過ぎた門灯輝き増している 太茂津
診療所門灯も消え過疎かなし マサ子
世に拗ねて門灯も暗く暗くする 小松園
門灯の下で野良犬番をする 富子
凝った門灯というのが青いアーケ灯 古方
蜂は疲れて門灯の灯へ帰り 牧人

騒音も生きていますという響き
へりの響き女のおしやべり途切らせる
気まぐれな響きで春の朝が明け
男なら祇園太鼓に身がしまる
打てば響くそんな二人にしたロマン
まぼろしの過去が響いてくる鼓
打てばびびく夫婦で渡る丸木橋
ガード下響きに馴れた飯を食い
元憲兵もう響かない靴で来る
隣まで響く長足のカレイ皿
たとう紙解けば朱の過去響き出す
反抗のドアー頭にまでひびき
岩を這う蟻の響きを聞いてやる

兼題「めし」

若本多久志選

しそ飯を握ってくれた母も古い
夕飯へ親子のぬくみ血が通う
めし代を稼ぐパチンコとは淋し
自転車操業めしもろくく通らぬし
米どころ御飯の艶もほめて盛り
おにぎりのリュックが勇む自然道
めし食って寝る闘病を羨まれ
制帽を脱いで交番めしにする
叩かれて叩かれてプロのめしを食う
昔昔銀めしという名もありき
めしたね亭主大事に飼育され
釜ヶ崎めししのれんに詩がある
また次の手を考えるくさいめし
めし粒を折の蓋から明治者
味気ない妻スイッチで飯を炊き
共稼ぎ早い方からめしを炊き

古方 生々庵 鬼遊 維久子 夕花 牧人 多志 美幸 眉水 夕花 花梢 醉々
カズエ 正朗 宗義 亜鈍 芳子 軒太楼 史好 史好 牧人 菜 修史 天笑 太茂津 葛城 文秋

一分間の柳論

川柳家の高齢化が叫ばれてから久しくなり
ますが、現在もその傾向がより急テンポで進
んでおり、どこの川柳会とも、これが共通の
悩みである事は否めない事実かと思えます
私のところの二十代の会員がある川柳会
へ参加した折、会場まで老人ばかりなのに驚
いて、老人クラブの会合にまぎれ込んだもの
と大あわて、玄張り目的の川柳会会場はそこ
見直したら、矢張り目的の川柳会会場はそこ
だったと言うような笑うに笑えないエピソード
さえあるのが今日の川柳会の実態です。一

両川洋々

体川柳とは若者に理解されにくいものなので
しょうか？私にはそうは思いません。川柳が若
者に理解されないのではなく、川柳を若者に
植えつけようとする努力が川柳家の側に足り
ないからではないでしょうか。種さえ蒔けば
いくらでも伸びる芽を内に秘めているもの
それが若者だと思えます。物質文化の危機が
叫ばれている今こそ、精神文化としての川柳
が見直される時ではないでしょうか。全国各
地で若い川柳の芽が育つ事を期待しておりま
す。

めし時を狙えばラーメンであしらわれ
割箸をこそげ一膳めしに馴れ
ひとさんのめし食て来いと云う親父
上品に握っためしでものたらず
めしめしめし浪速の街の息使い
繁昌の隅でほほばるのにぎり飯
めし焦げる匂い野良犬立ち止まり
めしと言えはライスですかと問いかえし
この辺でおひらきにするご飯出す
おまんまの種よと妻に励まさる
ペレー帽ゆっくりめしを嗜んでいる
捲意期それから朝めしヌキに馴れ
腹へっためしやらめしと娘が帰り
型押しのにぎり飯は母の味でなし
手の空いた順に幹事のめしになり
冷却の時間を労資めしにする
集金の知恵めしどきに居た不覚

滋雀 肖二 摩天郎 つき子 重人 花梢 小松園 三郎 好郎 喜風 醉々 恒明 一三夫 文秋 柳志 柳志 武雄
好一人 重幸 美三郎 綾女 十住庵 静馬 鬼遊 柳宏子 吸江 一三夫 柳志 吸江
好一人 重幸 美三郎 綾女 十住庵 静馬 鬼遊 柳宏子 吸江 一三夫 柳志 吸江
めしを焚くだけの女で日々平和
ご一緒にめしでも打算の夜となる
菜漬めしむさばる男の隙だらけ
提灯のめしという字のあたたかさ
めし屋から朝あけ初める釜ヶ崎
美容には大敵という女めしうまし
めしたき飯場女の赤い爪
働きがないから黙ってめしを食う
めし屋からビル建てに行く面構え
釜ヶ崎めしと言ふ字が生きている
鉄骨の上でうなずくめしの真似
梅干しとにぎりめしだが母の味
目出度い日猫まで赤いめしにされ
やれやれと茶漬に座る旅帰りに
刑事室めし食うたかと聞いてくれ
めし粒で貼ったと分る母の封書
夕めしがすめば犬から寝はじめ

めし時の客ああ又あの人か 多久志

兼題「手腕」

八木摩天郎選

意け者恋の手腕は別の別柳柳信
手腕家の策に当確うけあわれ祥月
仲人口ほどの手腕でない料理芳子
逆境に耐えた手腕がものを言いカズエ
手腕家にされて蔭では敵視され没食子
沈黙の手腕へ信用益すばえり野迷路
改造論の手腕おんなを騙ますだけ一三夫
抜群の手腕おんなを騙ますだけ一三夫
カミソリと言われる男の持つ手腕雀踊子
その手腕もてはやす人憎む人柳宏子
政党に出馬を乞われている手腕清人
ちんもくの手腕に白羽の矢がささり清女

雅号ぶつちやげばなし

(126)

りょうじん



木村涼人

きむら

日本人の手腕アチラで認められ静
献金をさせる手腕のまわり椅子醉々
学歴もうたがいたくなる手腕なり恒明
漬物に母の手腕がものをいい吸江
再建をしてくれた腕こわくなり一舟
手腕家といわれて寂し孤独感多久志
イデオロギーほどに手腕は芽ええず眉水
手腕家のギターは淋しい音で鳴り幸生
その手腕買える人が弱はめられず清人
手腕家もここで資格夜のバー好一
あざやかな手腕をかざる名工展敏
切れすぎる手腕上司をあわてさせマサ子
エリートを雇えば椅子をゆさぶられ一舟
買い占めに見せた手腕へ部長椅子形水
あまく見た部下の手腕が使いこみ生々庵

本名は「賢蔵」亡父には済まないと思
うが、あまり「かしこいくら」では無く
吾気でお人好し「いろは」「山月」等い
ろいろ変えたが、軍隊生活七年、さんざんな
目において復員したのが二十一年二月。旧友
が集まり川柳社の復活を策した席上、まあ何
んとか生きて復たので今後は大上段に構え
る事はやめてリラックスしたおとげさんで
生きるつもりで、何んとなしに「涼人」すず
しい人と号してしまった。今でも書きたい時
は書き、休みたい時は休み、肩の力を抜きな
がら歩くことになっている。所詮は趣味なんだから、と割切っているところも偶然つきたこ
の号がびったりと思う常日頃である。

(商業・五十四歳)

兼題「分身」

川村好郎選

手腕家と見えぬ社会の作業服富子
先代のおかげと手腕口にせす好郎
手腕よりコネを買われた天下り十止庵
手腕家の落目は妻に先きだたれ花梢
手腕家の父で名刺が見直され摩天郎
分身のぬくみ初孫抱き上げて正朗
分身と思うからこそ言う叱言カズエ
分身の血は争えぬ子のお好し軒太夫
分身の似ても似つかぬ子の育ち一三夫
分身と言うほどこなしたフライパン喜美子
影だけが僕の分身とは淋し緑水
岩田帯ゆるめ分身たしかめる維久子
分身という名目でこぎ使いたい天突
分身と名乗れぬままの通夜の席清女
分身のこがらふれる刑事室吸江
心音へ、我分身を疑わす小松園
試験管の中で分身浮き沈む志
分身という言葉に女騙される柳志
借りたとき仏の分身とも拝み滋雀
ダヴィンチの分身モナリザかも知れず美幸
孫悟空みたいに分身ばつと散る古方
槽糠の分身安堵の寝息たて与呂志
分身の十指に僕の血が匂う雀踊子
核一つ分裂をすする嫁貰う静馬
鯛の子が鯛にもなれず煮つけられ鬼遊
松葉杖分身となり血が通う牧人
親程に子は分身と分張る好一舟
身勝手な時に分身主張する好郎



▼かならず原稿用紙にペン書きで文字は楷書。締切毎月末着便まで。21行以内。書式は発表誌のように下三マスに雅号。

南大阪川柳会

金井 文秋報

虎の子が汗をかいてるいい話 静 歩
夕焼がこんなにきれい手をつなぐ 千万子
きれいだと褒める夫は酔うている 静 香
ネックレスきれいなものに見えてくる いわを
保育両血のつながりが計られる 雀踊子
デパートで見て日本橋で買い 柳 志
デパートに遊んで故郷の香に出会い 弘 生
デパートへ来て寒かった寒かった 美 幸
デパートからお返しがるだけの縁 新之助
突っ込んで聞けばデパート調べます 古 方
デパートに主婦の不満を捨てにくる 君 子
付添いがいらなくなつた日の自信 岳 人
付添いの笑顔は過去を話さない 水 客
付きそいで今日の機嫌をきいておき 一 栄
祝い酒持って来ただけ飲んで去に 花 栄
金婚をふたりで祝う宿の膳 吸 江
お祝いに何がほしいと言える仲 智 子
祝われてうれしい父の早い酔い 千寿子
金婚は結婚式を思い出し 百 酒
きれいな手だから貧しく且つ小さく

菜の花句会

鬼遊報

花札の桜牡丹は雨に泣き 美 幸
悪友の忠告だから聞くとする 幸 一
算数の答に指が足りません 儀 子
憧れを抱いて女は貝となる 智 子
分校の少年ひとり卒業す 醉 々
お互いに憧れあつていた誤算 河 産
インフレにいくじけぬ母の細い指 頂 留 子
あこがれていっせ淋しい距離を知る 雀 代
卒業へ母の苦勞にフト憧れる 雀 踊 子
憧れの人にもあつた泣きぼくろ 夕 花
ゲリラにはゲリラの友あり故郷を捨て 鶴 声
戸籍簿に触れて縁談まともらず 柴 二
憧れたこんなに狭いマイホーム 弥 生
さびしさは亡母の指輪のある限り キ ミ
憧れの新婚の夢さめた悔い 鬼 遊
立膝で練る花札に敗けている 柳 宏 子
新調のうちは親にも触れさせず 綾 女
花札はするなと叔父の名を出され 季 賛
指輪買う指の太さの念を押し 喜 正
三光も坊主も人の手に持たれ 林 蒼 蛇 楼 報
ハワイ川柳ウイロー社 林 蒼 蛇 楼 報
恋もせず芸一すじに姥楼 押 山
挽さばき一節で知る芸の幅 風 影
あの顔で女人はだしのかくし芸 エ 女
風格が出来て社長の芸達者 雪 子
立ち往生母が気をもむ芸芸会 蒼 一 筋 生 き 抜 く 名 取 悔 は な し
我が子だけ母には光る芸芸会 蒼 一 筋 生 き 抜 く 名 取 悔 は な し
この人にこんな芸がと見直おされ 快 夢 起
芸の重さに耐える瞳の美しき 北 海
峯 円

佳句地10選 (前月号から)

野村太茂津選

白紙委任女ごときに踊らされ 宏 子
○ベケの試験も裏目ばかり出る ひ 平
寝姿をのぞけば孫が笑ってた 祥 月
責任のないのが強いことを言う 鬼 遊
花嫁の方がシャンとした度胸 眉 水
しすまらぬ心へ振子の音ばかり 政 己
冬の川擦ればキンと鳴りすなり 不 朽
菊の手を休めて恩給貶すなり 摩 天 郎
一矢報いてしこりが一つふえ 吸 江
屈辱を握りつぶしている笑顔 天 笑

無芸でもこっそり金を貯めている 河 舟
芸なしはただ忙しく箸うごき カ 石
芸ゆえにじつとこらえて手をならい 三 口
彼の人に芸とてないが実があり 公 女
一介の大根ならぬ芸の冴え 草 海
しいられてうまく逃げるも芸のうち 柳 子 郎
芸文の裏面重なる浮き沈み 柳 子 郎
槍さびを下手に踊るも芸のうち 柳 子 郎
観客をハラハラさせて拍手わき 柳 子 郎
四疊半芸覚えたが家ほろび 柳 子 郎
いつしかに園芸趣味の輪となり 柳 子 郎
川柳たけはら 森 井 青 居 報
コスモスの頃より病みて春はそこ 静 水
ご免ねえベッドで迎えた記念日よ 房 水
売り切れてからもうないかもつないか 蘭 幸
子よ妻よ回り舞台は俺が押す 不 朽

万象の芽生え急がせる春の風
 差し向いと云う条件へ嫁くと決め
 インフレももう勘忍や鬼ごっこ
 はつきりと誤算と知った日の利
 ふるりの幼馴染と酌ぐ徳利
 執念の美容健康までもすて
 春風へ恋が芽生えてるベンチ
 大自然偉大な力知る芽生え
 インフレに去年の背広へやれぬ暇
 差し向いさせて貰って言葉出ず
 一本の釘にも愛のマイホーム
 セーラーに芽生えつつんで弥生月
 ペランダに据えた孫の天文台
 冬の旅湯舟で小唄ひとくさり
 差し向い今年に川の字になって
 恋芽生え鏡みるのがいそがしい
 急逝で無いのに惜しいとも惜しい

本蔭棟 六竜子 楽々 重人 胡蝶 吞歩利 季賛 徹舟 喜醉 秀峰 笑風 洛醉 三十四 武松 漁人 敏 与呂志 瓢太報 一也 節子 扇斗 星里 茂児 立児 好郎 瓢太 三幸報 富子 光治 武茂津 ふく代

スケールの大きさはほもてませず
 設計士スケール使う目の險し
 鮒ずしのなれて近江にまつりくる
 三人巨妊もる妻と祖母の顔
 スケールの大きな嘘で許される
 迷わずに子供は大きいものを取り
 口紅を少しひいてはまだ迷い
 どんぐり川柳会 谷垣 史好報
 恩売る気ないと鎖でからめられ
 味方より敵の一人を愛おしむ
 尻を叩くと尻込み飛び出せり
 尻ごみのしてる者から唄わされ
 尻ごみをしながらはえる釜ヶ崎
 泣く時だけ味方のように泣き
 大物の味方時にはもて余し
 ぶらんこの鎖へ命預けます
 女には吠えなくなつて鎖解く
 味方ばかり応援すると眠くなる
 現ナマが俺の味方を売り歩く
 朝顔の花は味方の家に咲き
 夫婦まださびた鎖を引ききつて
 せめても鎖の長いのに安堵
 十分に意見が合うた敵味方
 味方にも敵にもなれず愚痴を聞く
 当てにした味方票には出ぬ裏目
 指輪交換愛の鎖につながれる
 たよりない味方うしろからついて来る
 年寄りの味方は猫にきめておこ
 吉永川柳会(岡山県) 平井三与子報
 珍客の三日泊って邪魔にされ
 わびしさせめても若い歌歌う

清三 マサ子 其夕 勇次 盛次 三すえ 史好報 之保 鬼遊 薰風 克美 万里 吸江 一歩 いわを 居人 天笑 重夫 茂男 好郎 小松園 悦郎 美幸 喜風 奈々 雄峯 サヨ 浄美

第25回新潟潟県川柳大会

その日 六月二十三日(日) 10時〜17時
 その所 新潟市民会館ホール
 会費 八百円(記念品贈呈)
 宿題/雑詠(各選者に2句、同一句は禁ず)
 選者 白石朝太郎・阿達義雄・中島生々庵
 ・大野風柳

宿題/課題吟(各選者に2句)
 「ふくらむ」宮村桂路選「修身」木原美
 風子選「風雪」横村実選「闇」入江大
 魚選

席題/4題当日10時発表・12時締切。
 講演/「川柳映画と芥川竜之介の間」
 岸本吟一氏

表彰/各特選句及び合点宿題15位まで席題15
 位までに呈賞・総合一位に泉知事賞。
 ▼大会参加宿泊ご希望者は予約金千円(一泊につき)を添えてお申込みください。
 ▼大会終了後有志による懇親会を同会場でおこないます(会費千円)

主催 柳都川柳社

ハイジャック又かと馴れた日航機
 伴は三人川で寝る我が家
 子守歌歌うて親が寝てしま
 速達で女の返事ノと来る
 速達の切手斜に貼ってあり
 桃の灯へ私も一句ポールペン
 飲みすぎるときはぎだらけの歌になり
 武夫 栄仙 水景 久米雄 秋月 伊久野

速達が郵便ストで昼寝する腹の子が三々九度を笑ってる三者なら言える言葉も喉で耐え三角の底辺に居ても幸があり三面鏡どちら向いても嘘がなし大見得を切れば財布が軽くなり葉桜を眺めて女は燃えて来る底辺にも等しく値上げの波は寄せ

南海電鉄川柳会(大阪市)辻年度末新人社員ピンとこず年度末今日もお帰り午前さま年度末正直という数字出る小企業税吏がこわい年度末残業の食事かきこむ年度末年度末配当できる数字出し

雅号ぶつちやげばなし

い く こ



和田維久子

わ だ

(127)

胡風	年度末プランを替える金が出来	季
一声	役所皆肩凝らしてする年度末	一
大成	セールの日に発破がかかる年度末	儀
芳月	年度末趣味の会へは顔みせず	誓
三与子	京都塔の会	子
柳子	松川 杜の報	二
宗義	竹藪か風が生れて空に入る	水
芳明	遠いのは承知で嫁った娘の無沙汰	報
昭月	苔光る寺の冷氣に苔光る	求
春子	蜘蛛の巣が冬越したまま春を待ち	芽
保夫	出世する度に故郷が遠くなり	英
柳信	ふるさとへ飯場だんだん遠くなり	断
清女	離婚の判ついで夫婦も遠い人	飛
圭水	小屋の牛鳴けば祭の牛も鳴き	鳥
	雪の吉野にしみじみと聞く遠い悲史	史
		蘇
		笛
		三
		石
		求
		珠
		堂

ので、
「チエ子です」と云うと、香んばしくない姓名だ、改名しなさいと頭ごなしに云います。私は軽くあしらっておりましたが、また「主人の名は」と尋ね、八卦は嘘が九分であると思いつつも、何か胸さわがして、早速主人と相談し、大和の某所で、
「維久子」と改名いたしました。以来十五年、公文書以外は、この名を使っています。数年前、友人の閨秀作家藤岡花梢さんに結構な柳縁を結んでいただき、以柳名として皆様にお世話になっております。
改名をしても倅せ続かない
(維久子)

或る過ぎし日のこと、私の職場へ一人の男性が現われ、頼みもしないので、「貴女の姓名を聞かせてください」という

思った程遠くなかった帰り道
眼の先の塔が遠いと思う日も
川口 杜の報
善信
弘生報
誓二
鉄児
智子
暗子
三四
静歩
百酒
ますえ
生平
つね
秀村
弘生
繁子
満津子
春果

廊下からもうこちこちの社長室
送金へ浪費のことも書き添える
ロマンチスの胸で小さな花開く
ロッカーに母への土産置き忘れ
ローラースケート係へ伝授の腰のばし
ロソクに変る暮しの匂いする
論戦に明け暮れ実施はのびにのび
煙りに個性が見える白と黒
六文で値上げをしない冥途ゆき
抜け露地通れば駅に突き当たり
うれしさよ我は手動く足動く
安売りで今日はマイナス明日プラス
合格を祈る社頭の梅かたし
すっぱりと自分に浸る夜が好き
蜜蜂が媒酌に来る梅の里
男に成った女もきつちり髪を染め
竹内 翁童報

丸文川柳会
公害だ石油危機じゃで身は細り
安かった石油のツゲが一度に来
今一と確欲しい灯油に耐える春
世界地図広げさして産油国
石油危機どこ吹く風と花開き
石油でアラブは世界をおとり戻し
石油危機日本らしさを取り戻し
自転車はガソリン高をあざ笑い
メーカーにおどらされた石油危機
石油でふところ暖めた大会社
アクセルも慎重なる石油高

頭念
健山
春日
凡太
八州
玉仙
芳童
翁童
太鼓原
勝生

黙生

暑中広告受付!

本誌五分の一段が千五百円グループをおもちの方も、ご利用ください。

★原稿締切・六月末日

あなたもぜひ一口

▼七月七日の会場が変更しました。

▼二賞発表と同人総会は10月6日(日)の予定(会場未定)

(会場未定)

▼本社への不急のご用件は、なるべく書面をお願いいたします。午前中と夕刻以後のお電話は06-718-3218(不二田宅)へ。

この寸法が三百円

川柳塔社

振替口座大阪
三三三六八番

本社六月句会

日時 六月七日(金) 午後六時
会場 以和貴荘(いわきそう)

阿倍野区松崎町二丁目
電話622-1275番

(今月の出題・香川静之)

兼題	柳話
柳	「合いの手」
	「波止場」
	「快心」
	「雨だれ」
席題	三題 当日発表
会費	二百円
兼題	若本 多志 阿部 久志 小部 柳太志 小浜 牧人志 小島 静馬志 橋高 薰風志

★投句だけの方は切手50円封入

各題三句以内厳守

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区鯉谷仲之町20

川柳塔社

8月の兼題 「情性」 「余技」
「情動」 「性く」 「寺

八月号発表(6月15日締切)

川柳塔(10句) 中島 生々庵 選

水煙抄(10句) 川村 好郎 選

課題吟(各題5句以内)

「夏枯れ」 木村 一路 選

「風鈴」 光好 陽子 選

「避暑」 出原 真奇 選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

九月号発表(7月15日締切)

川柳塔(10句) 中島 生々庵 選

水煙抄(10句) 川村 好郎 選

課題吟(各題5句以内)

「地震」 木村 弥栄子 選

「雷」 蔵本 白梅子 選

「火事」 月原 宵明 選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

7月7日は句集刊行と川柳大会

定価二百五十円(送料十六円)

半年分 千五百五十円(送料共)

一年分 三千円(送料共)

昭和四十九年五月二十五日印刷

昭和四十九年六月二十一日発行

大阪市南区鯉谷仲之町二〇番地

編集者 中島 蓬太郎

発行人 藤原 童心社

印刷所 藤原 童心社

郵便番号 542

〒大阪市南区鯉谷仲之町二〇番地

発行所 川柳塔社

電話大阪・二七一―三三九八番
振替口座 大阪・三三三六八番

・ペンペン草・

★次号が出来るころには「同人句集・田桐塔」が編集室に高く積み上げられていたことであろう。

★封筒はかきわぬ出費もあつたが、とうなりのうなす大した赤字にもならずにはいけさうである。今ごろになって、まだ度胸がすわらないのも、なにせ狂風時代という、お母のわからない世の中に立寄りまわされているからであるうか。

食べすぎ・のみすぎに 新タケダ胃腸薬

消化 食・胃・腸、のみすぎ、胸やけ、二日酔い、胃酸過多によるむかつき、はきけ、嘔吐



375錠 37錠・90錠・180錠 箱付 169円・109円 **タケダ**

葉子コーナー

▼21歳の頃、成橋通りでインテリに間違われました。

ターバン式のブリーチを被っていました。お化粧をその頃もおまわしていませんし、思ひ思ひだったのが、知れまじう友達と大笑いしましたが、ホネインテリが好きな私、多少血が混んでいるのかも知れまじうね。

これからの四か月間はまた「暑いなア」の沖寒である。寒いには辛抱出来るが、このツツ暑にはツツがつかうとイヤで、あの強烈な太陽には弱い。それともう一つ困るのは、暑くなると食欲が進むことである。夏が来ると、かならず二、三キロふえる。こいつは敵わない。肥える上汁がよけに出るからだ。

★春、秋、冬と、たいが一年中、おなじ服装で通すのだが、夏だけは、白と黒とパツキである。

編集室や自宅への訪問者は、まことに無礼ではあるがハタリでおつきあひ願っている。

★たべ過ぎるから暑いのだよと云う人もいる。また、冬が来くないのはよすがたべながらだ。その冬よも夏のはやが、よくなれるのだから、暑さに耐えられないうちもれかるような気もする。

★秋田美先生には、ちよいとよいご馳走になる。たいてい床東料理のハムツカ、台湾料理の竜蝦である。そして、家の着の上座までいたただくのだが、それをまたほくか一人でおもてなしてからたべてしまふ。先日も、若い選手作家と三人がハムツカで舌つづみを打ったことだが、秋田先生がドンドン注文されるので若い作家が「先生、そろそろさようさよめられたら、おまへんと、エトツカをかけたら、先生は一心配しな、不二田ツカが持つよ」とおねがひ、

「さやあまきまへへ、今、成直しと行まへん」

★秋田先生も、ご病気をされるまゝまでは、よくたべられた。講壇に原稿に旅行に、よくあれだけからだがつくもの上周囲の者が心配したが、付つきまは、よくなれば、おまへんがも知れない。

★ほくは生まれてから感冒というのを知らない。高感で家の者がつきつきおねがひたこともあつたが、ほくは普通通りで、感染もしない。「アホはかきまかかん」といふが、ほくはかかん。やっばいよくなれるからだ、と思つたようにしている。

★食う話なら、今年中へ書いてもハツはつきないが、はくの場合、軽べつされるほうが多いので、機嫌のいいときだけ披露しよう。

★暑中伏暑をまたお願いいたします。

★「悪人」。家が岡山転勤になりました。山陰の方々の友情は、いつまでも忘れません。ありがたうございました。

「不・田一・夫」

純良医薬
第一製薬

うちみ・肩こりに

べタンと貼るだけ!

パテックス

〈新型パップ剤〉

パテックス

● 140mm × 100mm 3枚入

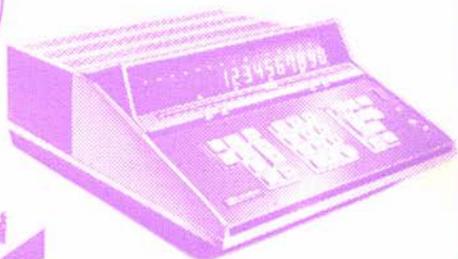


昭和四十一年一月二十九日
 昭和四十九年六月二十五日
 創刊大正十三年通巻五六五号
 第三種郵便物認可
 発行毎月一日発行

川柳塔

六月号

タッチでえらべば
 やっぱりサコム

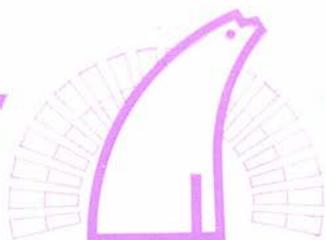


サンヨー電子式電算機

サコム
 SACOM

見やすい設計 100-152型 280,000円
 平面表示ゼロサプレス・√%キー付き
 16ケタ2メモリー高級品

SANYO 三洋電機株式会社



HORAI



蓬莱商品の目印

アイスクャンデー

あずき・パイン・ミルク・チョコ

ソフトクリーム

バニラ・ミックス・チョコ



大 阪・なんば

〈出張販売〉高島屋 そごう・阪神
 松坂屋・京阪デパート・奈良近鉄百貨店



定価 二百五十円 (送料六円)